

291-80



1200501363924



始





文部省督學官  
九州帝大教授

小出滿二著

業  
教  
育

東京  
大阪  
東洋圖書株式合資會社發兌



291-80

農村のことは人類文化に關する問題であるから、その根柢たる農村生活に對する教養については、最も意を注いで深く考究しなければならぬ。

本書は最近數年間に、文部省主催の講習會その他の折に試みた講話を基とし、更に二三を集録したものである。自ら執筆したのは少く、大抵は限られた時に思付を述べたものであり、殊に速記でないものもあるから、内容も盡さず章句も甚だ整つてをらぬが、斯教育に關する私見の一端は表してをるつもりである。中には同じことを繰返して煩しき箇所もあるが、暫くそのまゝとして纔に誤脱を校訂し、永田氏の切なる勸に應じて敢て大方の高教を請ふことゝした。

東京郊外 東中野にて

昭和三年 紀元節の日

著

者

序

一

Men must be taught as if you taught hem not,  
 And things unknown proposed as things forgot.  
 Pope, Essay on Criticism, II.

秋の野に  
 咲きたる花を  
 をよびをり  
 かき數ふれば  
 七草のはな  
 憶 良

土反其宅  
 水歸其壑  
 昆虫毋作  
 草木歸其澤

伊 者 氏

前篇 農業教育……………一

- 一 農學——二 實利と學理——三 學問は進歩する——四 農業教育の現状——五 理論の徹底——六 講義——七 試験——八 落第生——九 理解判断の實力——一〇 教育の目標——一一 つくらるべき人——一二 農學校の使命——一三 實際の業務——一四 設備——一五 教材——一六 實習精神

後篇 農村教育の諸問題……………七

- 一 農村教育に就て……………七
- 二 家庭尊重……………九

目次

三 高等小學の農業に就て……………一〇四

四 小學校に於ける農業教授……………一二五

五 師範教育改善の聲に和して……………一五二

六 實業補習教育に就て……………一七二  
實業補習教育とは何ぞ——公民科——職業科

七 農村成人教育……………一九六  
成人教育の大勢——時勢の變遷——綠化運動——新しい經濟學——田舎の妙  
味——農村の成人教育——成人教育の方法——結語

八 農村青年……………二五七  
都會と田舎——青年期——教養と農事——體育——労働と遊戯——歌謠、舞  
踊——競技、教練——風流——文明と舊慣——青年の客氣——現實に生きる力  
——天分を發揮せよ——及時當勉勵 歲月不待人

九 英國農村に於ける振興運動の一片……………二九五

一〇 フェリックス・ペコウ……………三〇五

一、婦人團——二、農村クラブ——三、振興委員會

x x x

深耕減種 立苗欲疏 非其種者 鋤而去之

眉しろき翁いできて千年ふる

門の山まつ撫でくほむるかな

思ふこと云はでぞ唯にやみぬべき

我とひとしき人しなれば

若し、健やかに暮し、己が職にいそしむだけの自由があつたら十分で、それだけの自由は誰にでもえられる。また、われ等は一定の条件を充してのみ自由となる。……上に何ものをも認めぬことが自由なのでなく、上にあるものを尊んでこそ正しく自由となるのだ。何故なら、それを尊みて自分をそこまで向上させ、わがうちにも貴きものを有ちて、それが同等だといふ價値あることを表すからである。

ゲエテ「エツケルマン對話」

## 前篇 農業教育

教育とは知らないことを覚えさせるのでなく、行ふやうに導くのである。……實に苦しい永續の難しい仕事で、親切 守護 警戒 教訓 賞讃ことに實踐でなされるべきもの。……愛兒を教養するのは良い子たらしめようとするので、儲けようためではない。農民でも、善良な人たらしむる以外に利得を期待すべき筈ではあるまい。……教育をば生活手段と思ふのは大きな一般の誤である。儲かることではなく、金のかゝることなのである。……立派な學識 哲理 藝術は、いつでも實として購はるべきもの、生計のために賣らるべきではない。人は暮しうるために學ぶのでなく、學びうるために活きるのである。(F. ラウン・オブ・ワールド・オリヴァ 百四十五節)

ジョン・ラスキン

## 一 農 學

農業教育といへば、農に關する學理を教へることである。然し、知識そのものを教へ實際の技術を覚えさせただけで教育が出来たと考へてはならぬ。知識そのものと茲でいふのは悪いかも知れないが、私の意味は黒いとか白いとかいふ單なる事實を教へただけでは足りぬといふのである。それで、農學を教へる、その農學とは何かといふことが第一の問題となります。

農といふことを此處で詳しく説明する必要はあるまい。農と農業とを區別して見られると思ふが、農學とは即ち農業の學で單に農の學問ではないと思ひます。この事は分り切つたことのやうであるが動もすれば誤解し易い。殊に農業技術を取扱つてゐる教師は、多く博物や理化の知識を應用してゐるから、試験管を振つて分析したり、顯微鏡を覗いて勉強して居る、自分では農學の研究をやつて居るつもりだが、實は化學

や植物學をやつて居る場合が少くない。無論一學究としては何の研究をやつてもよく、農學の教師として博物や氣象その他の研究をなす必要はあるが、今自分のやつて居る事は、農學か植物學かの別は明かでなければならぬ。化學をやりながら農學の研究だと間違へて居るやうでは、それが自ら生徒に響いて面白からぬ結果となる。

農業の學であると言つても、その根本は作物や家畜を育てることであるから、生物學、自然科學が基礎であることは言ふまでもない。たゞ良い大根を作り良い豚を育てるだけなら、それで十分であらうと思ふが、その結果を差引して收支相償ふかといふ經濟を考へねばならぬ。そこに農だけでなく農業といふ意味があるので、或場合には學問を自然科學と社會科學とに分け、經濟學は社會科學に屬するといふのである。農業の學は自然科學を基礎とはするが、その主意とする本來は社會科學であると、斯う云ふ理窟もあると言ひ得る。農學教授には此の點を一つ根本に置いて考へねばならぬと思ふ。

農學は非常に厄介なものである。それは第一範圍が甚だ廣いと云ふこと、次に生物を對手として居ることから来る。四季に應じて色々な作業をする、その複雑さは特別なものであることは茲に云ふには及ぶまい。生物であるから動いて居る、動くこと云ふのは單に位置を替へると云ふばかりでなく、内に於て動く即ち發育して居るので、さう云ふ物を取扱つて居るのであるから非常に困難である。そして今言ふた經濟と云ふ事で結び付けて行かなければならぬから、其處に又一段と困難があるのである。

## 二 實利と學理

學問といふ以上は、徒に功利の末に走つてはならぬことを又忘れてはならぬので、學問は元來本を重んじ眞理に徹すべきもの、その點に行くと如何に小さな事柄でも非常に大切な問題となる。嘗て聞いたことであるが、アメリカでスエズ運河の開鑿をやらうとして、豫算を作つて事業を始めた。所が色々な支障が出て來て、金はウントか



ゝるが開鑿事業は一向進行しなかつた。しかし、ゲータルと云ふ技師長は偉い人であり、ローズゼルトといふ是も偉い人が大統領であつたから、大方針が正しいなら金は客まぬといふので、幾度か費用を追加して工事を進め、終に成功して千載に傳へることゝなつた。何故にさう金が要つたかと云ふと、彼處は非常な濕地で蚊が多く、マリア熱の傳染が盛んなために、どうしても勞働の能率が勘定通りに進まなかつたのである。それで先づ此の蚊を撲滅することが先決である、これがためには如何ほど掛らうとも止むを得ぬと、こゝが大決心といふのか大勇斷といふのか、凡人の爲し得ぬ所で、殆ど最初の全體の豫算ぐらゐを蚊の驅除だけに費したのである。それに必要な蚊の習性を知ることであつたが、段々調べて見ると以前に或學者が蚊の分類を研究してゐた。其の學者が蚊の習性を調べて品種や性状を發表した時には、蚊を分類して見た所で大したことはあるまいと嗤はれたさうである。然し其の研究があつたからこそバナマ運河は完成されたと云はれて居るが、私は非常に面白いことゝ思つて居る。

成程、蚊と云ふものは詰らぬ小さな虫に過ぎぬが、それを分類し研究することは學問として大きな値打のあるばかりでなく、思はぬ所に實益を來さしむるものである。農業上に關係のある多くの昆虫などは、たゞ虫として研究するだけでは自然科学に屬するので、その結果を應用して作物や家畜に役立たすには如何にすべきか、それを更に研究するところに農學の本領は存して居る。故に動物學で研究する時には功利を考へてゐるには及ばぬが、農學では常に經濟を目標とせねばならない。たゞ農學は直ちに農業の工風ではないから、研究には暫く功利を離れてやらねばならぬことがある。その研究が、理に叶ひ眞に徹底して居れば、いつかは必ず實益となつて果を結ぶものである。

### 三 學問は進歩する

學問は始終進歩して居るもので、學説も變化すれば其の應用も違つて行く、その進

歩變化に應ずることが出来なければ役に立たない。役に立つと云つても世間の用ばかりを考へる意味でなく、學理の研究と云ふ立場からも見たいのである。他の言葉で言へば、今日の日進月歩といふ世の中で、兎角うといふと云はれる教師は、昔習つた事を金科玉條として教へて得意になり勝である。さう云ふことではいかぬのは言を待たぬが、自分だけ遅れて居るのなら未だ良い、それが直ちに生徒に響くから雷に迂遠なことを授けるといふだけに止まらぬ。若し此の進歩といふことを忘れたら、學校で教授する時には必ず最新の知識、最良の方法であらうが、生徒が、唯それだけを覚えて居るのでは、半分しか教師たる役目を盡して居らぬと思ふ。それではいけないので、「今日までの所では此處まで研究されて分つてゐるが、是から先き進んで一層明確にせねばならぬ。また、必ず少しづつ、でも發達するものだ、故に君達は學校を卒業して後も、絶えず注意して時代の進歩に應じて遅れてはならぬ、たゞ在學中に得た知識技能を守つて居るだけでは、卒業當時には輝くのであらうが、五年たち十年過ぎたら取殘されるぞ」

かう云ふことを始終生徒の頭に注ぎ込まなければ、學問を教へるとか教育をすると云ふことにはならない。

此の點に於て、現在の我が農業學校の教授には遺憾な點が少くないと思ふ。先生は非常に熱心で、何でも役に立つやうにと彼も是もと教へようとする、色々なことは知つてゐるが頭が出来ぬから、卒業した時には相當の事を覚えて居つて便利のやうであるが、三年経つても夫れだけで餘り進まずに停滯して居る。而して時代は段々進んで變つてゆくので、遂には折角覚えて居ることも古くなり、十年も経ると一向に役に立たなくなる。かういふ弊は、思ふに餘り役に立つと云ふことを主とし、それよりも大切な頭をつくることに留守になつたのではあるまいか。もう少し不親切に取扱ふやうにと茲で云ひたいので、少し語弊はあるが、餘りに親切に過ぎて隅から隅まで手を取つて導くと生徒は死んでしまう。もう少し教へることを控へて置いて、生徒自身に研究する餘地を與へねばならぬ。斯う云ふ風に導いて置くと、出てから後も自分で研究

して、時勢に遅れぬやうに進み得るだらうと思ふ。

#### 四 農業教育の状況

##### 一

我が農業学校の沿革を見るのも、此の邊の事情を解する参考となると思ふが、明治の十何年頃から農學校が出来たもので、當時は可なり各地方に建設された。それが色々の事情で衰退したが、それから幾多の消長を経た後、明治三十年頃から再び農業學校が出来、その數も年を追つて加つたのである。今日は可なり盛んであると言へるが同時に或意味では行詰つて居ると思はれ、一つ根本からの建て替へを要するのではないかと云はれて居る。抑も、最初に農業學校が出来た折に、どんな者が生徒として這入つて来たか、どう云ふ志望、目的を有つて来たかと云ふと、細かに統計を取つた譯ではないから斷言はしないが、大概に見當をつけたところで凡そ次のやうな事情が

あつた。即ち一般に考へたことは、今度農學校が出来たさうな、今の時勢になつたのであるから、二男や三男は養子の口ばかり探してをる譯には行かぬ、また分家させて田地を分けることも出来ないといふので、それらを多く農業學校に入れた。長男は家をついで祖先傳來の百姓をやればよい、次男三男は何か獨立した生計をたてねばならぬ。それには是非學問をさせねばならぬ、是非教育しなければならぬと云ふ時勢になつて来た。田舎でも上流の家庭では、氣位が高いから政治家にしよう、文學をやらせようといふ風に、その方の教育を受けさせたが、中流以下はさうは行かない、とても大學などに入れて出世させるわけには行かぬ。さらばとて小學校だけでは満足が出来ないから、どう云ふ方面に向はしたらよからうかと迷ひ、大多數は俺の家は昔から百姓であるから、まあ一つ農業學校へでも入れたら宜からうと云ふので、次男三男が多く農業學校に這入つた。

## 二

世間では農業を學習して卒業したのであるから、定めし立派な技倆を得て來たであらう、皆落付いて、生れ故郷にでも歸つて新しい農業でもやるだらうと思つた。農業學校規程を讀んで見ても、將來農業に従來する者を養成する所だと書いてある。所が農業教育を受けて出た次男三男は、家へ歸つても耕すべき自分の田畑はない、養子に行く口を當にも出來ぬ、又大に自營を企てゝも、容易に借入れる土地もなければ金もない、如何に學問はしても素手で實業を始める譯には行かぬ、三年も四年も學費を出して偉い學問をしたのぢやないか、ブラ／＼して暮しては居れまいなど、云はれる。他に雇はれて月給取にでもなる外はなかつたので、又世の中がさう云ふ技術員を要求もしてゐたのである。かうして農學校卒業生は多く月給取になつて、洋服を着て廻る自ら鎌や鋤をもつよりも受賣や孫引の理論を辨することになつた。實際に何か作らせると見ると茄子一つ十分に實をならさぬといふので、世評は怪からぬといふことゝなり

折角教育を受けても月給取になると非難したのである。今でもさういふ非難はあるがこれは非難をする方が寧ろ間違つて居るので、さうせざるを得ない風にして置いて、月給取となつたと難ずるのは無理と思ふ。何一つ出來ぬと責めるのも随分ひどいので今まで百姓には學問は要らぬと考へて居つたが、その代り六つ七つ頃から親と一緒に仕事を見て暮し、いつとなしに毎日導かれて教へ込まれる。農學校で三年も五年も學習するといふが、農業のやうな生物相手の複雑な仕事を、さう十分に覚えられるものぢやない。

## 三

昔から讀み書き算盤と云つて、學校で習ふものは大概定つて居たが、學校へ行かなければ「いろは」も讀めない、學校へ三年も行けば一通りのことは出来る筈、十七八歳までも勉強して日本外史ぐらゐ讀めねばならぬのは尤もな考である。所が農學校の卒業者はどうかと云ふと、到底さうは行かぬのが當然ではあるまいか。三年や五年の

期間農學校で學んだからと言つて、立派に茄子でも稲でも麻でも烟草でも作れる、豚も飼へれば牛でも馬でも鶏でも皆飼へるといふわけに參らぬ。世間では此の出來ぬことを要求したので、當時の文教に立つた當局や學校長などが、斷然として此の無理な非難を排し、其の間違つて居る事を刎ね付ければよかつたが、寧ろ屈服したのではなかつたかと思ふ。何でも學校の卒業生を役に立つものと思ふならぬといふので、盛んに實習などをやり、實地に於て百姓に負けてはならぬと、是も教へねばならぬ彼も授けねばならぬと苦心した。さうして教へ込んで卒業させて見ると、成るほど或程度までは役立つ、頭の無い百姓にくらべて教へた丈けのことは優つた點が見られる。けれども夫れだけで、教へられない事を自ら調べて知るといふ能力も少く、また時勢の進歩に伴つて益々進めて行くことも出來ぬらしい。卒業してから三年たち五年たつと、モウ古くなつて餘り優つた點はないといふことになる。今日まで此の考へが續いて、學校では役に立つやうに教へねばならぬと云ふので、先生が親切に思へば思ふほど彼

も是もと考へ、無暗に時間を多くしても矢張り足りない。家庭で習ふべきこと世間に出てから覺ゆべきことまで、短い忙しい間に教へようとするので、これが今日の弊害とも云へば云へるものであらう。現に我が農業教育には色々の問題があつて、學科目が多過ぎる、授業時間が多過ぎる、實習に餘り筋肉を使ひ過ぎると云はれて居る。斯う云ふ非難は皆その根原が、餘り手近な親切に過ぎたことにあつたのではあるまいか。

## 四

日本の學校は先づ大學が出來、其の學科課程が定まり、之を程度の低い中等學校でも套習し、甚だしきは高等小學や舊乙種程度などでも似たものをやつて居る。この點は是非その根抵から改めねばならぬと思はれ、私は現に文部省に這入つて以來、機會ある毎に學科目の併合は出來ぬものと相談して見たが、多くは夫れがよいと随分賛成されたのである。然しそれを實現したのはまだ極めて少く、舊慣を改むといふことは實に難しいと見える。たゞ近來その傾向は大分出來たので、數校に過ぎぬが既に實

施したのも現はれた。農業に關する科目を十數にも分けてゐたのを、三つか四つかに大別するまでには至つた。私は宜しく斯うあるべきで、この位に併合することは決して難しくないと思ふ。今のやうに多くに分れてゐるのでは、それが本道でそれが支線だか分らぬ、一向に統一がとれぬから十分に活用されぬこととなる。之は實に大きな缺點であるから、一本の大きな農業と云ふ科目を置き、之を順序よく教へたら輕重が分るだらう。若し、病虫害などに不十分であるなら、それだけを別に何十時間でもやるのは少しも差支ない。西洋ではプリンシプル・オブ、アグリカルチュアと云ふやうな書物を使ふが、一冊の内に農學を組織だて、大體を包含して居るので、それだけをやれば先づ一通りのことは分る、更に足りない部分だけは別にやればよい。かういふやり方が日本では出来ないものであらうか、將來は何とかして此の方針で進んで行きたいと思ふ。或はそんな書物一冊ぐらゐるでは、餘り簡單で詰らなく役に立たぬと云ふかも知れないが、私は簡單どころか一冊の内に本當に大切なことは盡きて居るので、そ

の原理を十分に納得させたら、始めて應用の利く頭をつくる事が出来るのだらうと思ふ。何故つまらなく思ふかといへば、今述べた理由で徒らに事柄や方法の末に馳せ、根本を忘れたと云はれても止むなき弊に陥つてゐたからではあるまいか。

## 五 理論の徹底

教育と云ふものは決して直ちに間に合ひ、役に立つ者をつくることではない。それだけならば便利な機械をつくると同じになり、靈のある人間養成といふことにならぬと思ふ。學校卒業者を捉へて直ちに何をやらしても出来るやうに考へるのは間違つて居る。豚を飼ふことの出来る人、稻を作ることの出来る人といふ、一つの便利な道具をつくるだけではならぬので、苟も教育といふ以上は、性格を錬磨するとか人物をつくるのが目的である。その根本の目的が達せられたなら、自ら豚を飼ひ稻を作り得るといふことが結果として得られる。立派な人間を作ることが出来たなら、必要に應

じて其の人は豚も克く飼へるし稲も上手に作れるのである。かういふ譯で人を養成するには、技術を教へるにも能くその原理を呑み込ませねばならぬ。私は時々極論するのであるが、農學校あたりで教授する場合に嘘を教へても宜いと云ふ理窟も成立つので、例へば稲を植ゑるのには三本か五本の苗を、どの位の距離間隔で挿し込むと説く。その場合に三本とか一尺とかいふことが大切なのではなく、何故に數本を一株とし何故に適當に隔てねばならないかといふ、その理論が大事なのである。三とか五とかの數は適例に過ぎぬから、或は理由さへ克く納得せしめ得るなら、五本を八本と云つても、七寸を一尺と間違へてもよいといふのである。何故に何尺位離したが宜いか何故に何本位を一株とすべきかを分らすのが目的である。茲に一つ注意したいのは理論といふが、決して抽象的な議論だけ説けと云ふのではなく、説明は飽くまでも實物實地に就いて述べねばならないと思ふ。稲はかういふ習性の植物だから、かく取扱はねばならぬと教へる、麥に就いては其の習性や栽培の季節や目的で、稲と似た點は取

扱も同様でよく、違つた所は全く更へねばならぬ。それらの理論を克く納得せしめたら應用が利く、何も稲作に就いての方法や注意を教へ、更に麥に就いても取離して説くといふ風に、事物だけを知らせて満足すべきではない。白とか黒とか長い短いの問題ではない、それは一つの教材に過ぎないので、何故に白くあるべきか何故に黒くあるべきか、何故に短くし長くすべきかと云ふ原理原則が大切なのである。

## 六 講 義

### 一

また、も一つ極端なことを云ふやうであるが、よく實習と講義とは一致し連絡がなくてはならぬと云ふ、其の通りに違ひないが、考へ方によつては之は間違つて居ることも云へる。實習と教授に連絡があつてはいけない、統一のない方が宜いとも云へるのである。私は或學校で授業を參觀したことがあるが、其の時、梨の剪定に就いて教へ

て居つた。掛圖を示したり繪を描いたりして、梨の枝振りは斯うである、此處を斯う摘みて斯う切る、斯う伸びるから斯うするのだと教へ、さうして實習は別に果樹園でやる、それを連絡あり統一あるものだと云つてをる。然れども之は實習でやるべき事を教場でやり、園で更に練りかへすといふのである。そんな事を教場で説いても容易に分るものではない。枝の伸び方や剪枝して芽の伸び方など、原理原則は十分に説かねばなるまいが、同じ方法に属することを空にクドクドしく説くには及ばぬ。實習の設備がありさへすれば、其處で教へたら宜いことを教場で不明瞭な説明をするのは時間潰しである。そんな事をやるから時間が足りないのである。是は一つの實例を擧げたに過ぎないが、さう云ふ意味の連絡や統一ならば無用である。教場の授業はやめたがよいので實習だけで十分である。拙な連絡や統一は却つて害があるともいへる。

## 二

さう云ふ風の考へ方に依つて色々言ひ方もあると思ふが、要するに一つのプリンシ

ブルを體得させ納得させると云ふのが主眼で、單に物の大小や色などなら兎も角も、その理論は暗記させ鸚鵡返しに言へるからさて分るものではない。謂ゆる靈と靈との交渉であり心と心との接觸で、それに依つて初めて覺り得られ納得さす事が出来る。禪宗での修道には坐禪を組んで色々な問答をやる、双手を拍ち合せてごつちの手が鳴つたかを問題とする。説明して分らぬものでも心と心が其の間に自ら相通する、謂ゆる不立文字と云つて、言葉や文字では現はせないものを心と心で相通しようとする。教育も矢張り同様だと思ふが、さうでなければ通信教授で澤山であらう。教師と生徒が相接して顔と顔とを見合つてやる必要はない。從來や、もすると徒らに筆記をさせ暗記で足れりとした、實につまらぬ無駄をやつたもので、極端に言へば今の授業時間を三分の一に減らすことが出来やしないかと思ふ。勿論そのやり方は大いに改めねばならぬので、近頃の流行語で云へば、モウ少し自修的、自學的、自發的の精神を生徒に注込むべく、さうしたならば、時間をウンと減らしても現在以上の効果を擧げるこ



とが出来ると思ふ。

私は未だ子供を教へた経験がないから間違つて居るかも知れない、間違つて居ることは十分に正して戴きたい。どうぞ「何を空論をはくのだ」など、度外視しないで下さい。私の取扱つて來てゐるのは少し大きな生徒ですから趣きが違ふかと思ふが、私も多少の経験はもつて申すのである。細いことを澤山に教へても餘り役に立たない、そんな事は直ぐに忘れてしまふからである。

## 三

それから眞面目一方で與へられた時間に初めから終りまで、ノートに依つて脇目もふらず教へて行くのも、大變宜いやうであるが必ずしも宜くはない。如何に金言名句を吐いた所で、生徒がそれを聴かないならば何にもならぬ、馬の耳に念佛であるばかりか、かたから耳を傾けぬといふのでは始末に終へない。下手な事でも直ちに間に合はぬことでも聴かせる方が宜い、聴かれない講義ならばやらない方が宜い、斯う云ふ

事もあるから注意しなければならぬと思ふ。私も高等學校の學生時代に感じた事があつた、立派な説明ではあつたが随分つらい眠くなる講義であつた、ある時直ぐ二三席前の生徒が居眠りをして大いびきをかいた。すると先生が講義をしながら其處へやつて來て、机をコツ／＼と叩いて其の生徒を醒まして「此處は眠る所ぢやない」と一言叱り、また其のまゝ教壇へ歸つて説明をつゞけたのである。私は其の時、なつて居らぬと感じ、若し先生が笑顔で冗談の一つも云へば、全級の生徒は哄笑して元氣づき、能く頭を働かしたらうと思つた。それ以來、私は學校の先生に對してトカク妙に反抗といふほどでなくとも、餘りに學科に力を入れなくなり、席次や點數が漸次に低下したのである。それで今でも生徒に對するよりも教師に對して寧ろ同情が少く、現在の役目にあつて相濟まぬが多く教師を責めたい。

教室で喋りさへすれば生徒は皆喜んで聴くものと思ふのは飛んでもないことで、聞くか聞かぬかは向うにあるのだから、何とかして聴かせるやうにしなければならぬ、

聽かせるが爲には時には脱線することも妙である。私など自分の経験でもさうだと思ふので、高等學校や大學や其の他の講演會や演說會に行つて随分聞いたが、どんな事を覺えて居て、どんな事が役に立つたかと云ふと、眞面目に教科書にあるやうな事は案外覺えてをらず、却つて脱線したのを聽かされたことがハッキリ覺えて居る。有名な經濟學の和田垣先生には二年間に亘つて講義を聞いたが、經濟學そのものは餘り教へられないで、其の點は残念に思つた。私は駒場を出てから暫時法科大學へ行つて、經濟學や法學の一部を聽いたものであるが、謂はゞそれだけ餘計に手数が掛つたのである。その點は損であつたかも知れないが、他面に和田垣先生から聞いた事は相當によく覺えて居つて、それが中々よく後の經歷に働いたのである。中にはクダラない事もある、有名になつた話であるが、「英語の一番長い字を知つて居るか」と問はれた私どもは色々考へて綴字の多いのを二つ三つ云つて見ると、「スマイルズ (Smiles) と云ふ字だ、始と終とが一マイル (哩) つゞいてゐるからね」といふのであつた。馬

鹿げた笑話に過ぎないが、こんなことでも時として社會に立つて暮らす上に非常に役に立つことがある。またエベリシング、オブ、サムシング (Everything of something) — サムシング、オブ、エベリシング (Something of Everything) と云ふことを聞いたが、これなどは深く感銘して私には頗る力強く働いて居る。即ち人は一の専門を有たなければならぬ、その事柄は何でも知らうと心掛けねばならぬ、而して同時に専門外の事には一向分らない更に趣味がないと云ふのも困る、世間の何事にあれ幾らか其の事を心得て居ると云ふのである。これはイギリスの諺であるが實に味のある名言で、先生から聞いて忘れないばかりか大に感謝してをる。

## 四

斯ういふ次第で講義は唯眞面目にすれば宜いと云ふわけではなく、人を見て法を説く應病與藥といふことも必要であるが、熱を以て感銘せしめねばならないと思ふ。デンマルクで有名な國民高等學校を實現した恩人にクリステン・コルといふ人がある——

尤も是はデンマルクの青年教育に關したことであるが——「生徒に對しては感激を與へる、激勵を授けるにある、教師のすべき事柄はそれだけである」と云つた。詰り話をして居る間に「成程さうだ」と感ぜしむれば生徒は奮發の氣を起し、やらうといふ氣が起れば生徒は自ら研究して行く、それから些細の事柄などは質問に應じて指導すればよい。それをくゞく聞かせて暗記などさせて見たところで、試験の時には覺えてゐても三日経たぬ間に忘れてしまふ。無論暗記も必要で決して私は之を一概に悪いといふのではない、若い時代は暗記も一つの修養であるから、試験勉強も時には甚だよいことである。然し、全體の方針として試験勉強をさせて得意となつて居るやうでは良い教師とは云へまい。

## 七 試 験

嘗て鹿兒島に奉職してゐた時のことであつた。どうも近頃生徒が勉強しないから困

る、之は試験を嚴重にしないからだらう、もつと試験をやかましく監督を嚴にしよう」と云ふ相談があつた。私は左様な必要があるかと疑問を發すると、一體君はどんな風に監督するのかと聞くものがあつた、その時私は監督など何も實はしないと答へたところ、それは怪しからぬと校長からも難せられた。そこで私は色々説明した、大抵の試験の場合に問題を出すと生徒が一生懸命に書く、私は自分の室へ這入つて仕事をしながら最後のものが答案を集めて持つて來るのを待つて居る。然し、それだけで採點するのではないと辯解もし主張もした所「それは宜い」と、流石は玉利先生で「小出君の遣方は夫れでも宜しからう」と言はれ、私は格別に改めるに及ばぬといふことに認められた。試験なども決して妙にこだはると云ふのは間違ひだと思ふ。私の試験法などを申上げる必要はないが、此處には私の試験を受けた人も居られるので、毎年同じことばかり繰回したわけでもないから、その一端を述べて見れば、私は一年の内

に幾回もやる、色々違つた方法を行つて採點をする、教へたことの問題を出して書か

せる謂ゆる試験もやるし、その他の課題を出して置いて報告を取ることもやる、或る場合には何か調査をさせて教室で皆の前で報告をさせる、翻譯をさせて見たり、大意を書き直させたりする。それを一々採点して置いて平均すると、人には各その長短があるもので餘り劣つた點をとるものはない。今も私は駒場で少し手傳つて居るが、試験はさう云ふやり方をするので頗る便利なおことがある、役所の都合で不意に休まなければならぬ時には、問題を送つて助手に頼んで試験をして貰ふ。さうすると休んだ事にならないから體裁もよろしく、生徒も力だめしといふ風で随分よく書いて出す、特に試験のために授業をやめねばならぬ必要もない。三、四回も變つたことをすると大抵落第點は取らないもので、餘程根性のひねくれた者は別であるが、さうでない限り決して捨てる人間はないと云ふ事を、私は浅い經驗ではあるが固い自信を持つて居る。落第がないと云つても私の點は可なりからい、かくて標準に照らしてつけると公平に行く、酌量してあまい點を付けると不公平になり勝ちである。可なりからいから何時

でも一割や二割は五十點以下が付くが、色々のことをやるので長所と短所が旨く行つて、平均すると多くは及第點となる。私はモウ二十年近くも毎年多數の答案を見て来た、去年などは随分ひどいので此處の本科と實科を合せて百人以上、鹿兒島と福岡へ頼まれて臨時講義をやり、鹿兒島では三年全部で矢張り百人を越えた。それに丁度檢定試験もブツかつて紙數は大變のものであつた。今まで檢定試験には零點もあつたが學校の試験には落第點の付いたのは殆ど無かつた。

## 八 落 第 生

### 一

また學校であるといひ、どの採點するまでもなく分る、一學期の末か二學期の初めになると誰某はごうも良くない事が分る、さう氣がついて同僚に聞くと矢張り悪い。さうなると何かにかこつけて、私宅へでも呼んで来て、色々事情を聞いて君は點が悪い

やうだと注意してやる、落第する位なら思ひ切つて休學したらどうだ、そして學力なり體力をつける方がよからうと云つてやる、中には病氣で弱つてゐたり、家に問題が起つて居つて心配してゐるのもある。私は鹿兒島に居つた前後足かけ六年といふ間に一二度たつた五圓か十圓か貸してやつたことがある、それで難關を切り抜けたといふのか全く變つた人間になつて大いに勉強した生徒もある。相當に苦しんで這入つて來た生徒だから、専門學校などでは一通りやれぬ筈はないので、初めに少々悪くても注意さへしたら——公にでなくこつそりと注意して感じさせねばならぬ、人情を以て誠意を以て相談相手となるのだ——後には大抵取りかへすものである。

所が落第點を付けるのを得意とし、試験を以て威して勉強させようなどと考へる教師がある、誠に困つたものである。之も事實談であるが、學年試験の成績を見ると、或課目が殆ど三分の二まで落第點が付いて居る。私は一學科を擔當して教授するのに一割か二割なら分るが三分の二にも達するといふやうな多數の生徒が落第點といふこ

とは分らぬ、これは生徒の罪ではなく先生が悪いと考へた。そこで試験をやり直すか點を付け直すか、之は教へ方が悪いか採點法が悪いかだと極論したのである。

## 二

中には斯う云ふ人もある、近頃生徒が怠けていけないから試験を嚴重にしなければならぬ、癖になつて宜しくないから時折には落第生を出すがよいといふのである。斯う云ふ考へで及第させても悪くはないが、偶に不幸で點の足らぬ生徒を犠牲に供して他の見せしめにし、一般が恐れて勉強するのを期待するのである。之は今まで可なり多いと思ふが、非常に間違つたものだと思はれる。他に示す爲に罰するといふ思想は既に棄て去られた一世紀以前のものである。昔は罪人が出來ると磔や晒首にした。往來を引き廻して皆も悪い事をするのと之と同じ目に遭ふぞと教へたが、今では思想が全く別なものとなつて居る。斯う云ふ罪人が出たのは元より其の人の責任だが、社會も良くないので共に其の責任を負はなければならない。何とかして此の罪人を本心

に立返らして立派な人に直すことは出来ないか、監獄などは此の改心感化に苦心をすべき場所となつてを。どうしても殺さなければならぬのは已むを得ず死刑にするが、監獄の片隅でコソコソ成るべく人の氣のつかぬ真夜中に行ひ、屍體も表門からは運ばないで裏門から出す、世の見せしめどころか出来るだけは知らさぬやうに處断する。現在の學校でも其の通りで、已むを得ず退學させなければならぬ落第させねばならぬならば、コソコソ當人の耻にならぬやうに成るべく他の氣づかぬやうにすべきである。及落は當人の將來をのみ思つて極めれば宜いもので、他人に及ぼすことを考へ合せらるゝなどは越權の沙汰だと考へる。由來、教育は飽くまで個人的のもので、一人と一人で行はなければならぬもので、今日のやうな學級を以て多數一所にやるのは已むを得ざることだけだと思ふ。故に其の本人だけで落第なり及第なりを定めたらよいと、嘗て或教授と激論したのであるが、今でも何處へ持つて行つても慙かしくない主張と思つて居る。農學校に於ては生徒が若いのであるから、多少その趣は違ふことゝは思ふが、

及落を決めると云ふ趣旨に變りはあるまいと信じて居る。妙に落第させて落膽させないでも、よく訓諭して學力が足りないものなら現級に留めればよい。また卒業して後に半年なり一年なり残して補はしむるもよい。

## 九 理解判断の實力

教授は事物を多く覚えさせるといふのでなく、それによつて原理原則を納得せしめ活用の力を備へしめるのが目的で、言ひかへれば判断力を與へると云ふことになると思ふ。判断力を與へるとは事物に接して左か右かを見分けることである。例へば水田に行つて稻の出來工合を見る、葉が妙に黄ばみて勢が衰へてゐる、これは何の爲であらうかを確實に決定するのは容易でない。ちよつと見て葉が斯う云ふ様になる原因は色々ある、病氣に罹つても害虫に侵されても、または風のためにも起るが其の内どれだらうか、迷つてゐては更に分らぬが、本當に經驗を積んで分つてゐる人には、殆ど

直覺的に多分かうだといふ見當がつく、その判断の正しいか正しくないかでその人の偉さなり力が知れるのである。直覺的に見當が付いたならば、それに應じて尙細かに検査して見れば宜いので、顯微鏡に照らすこともあらう薬液に浸すこともあらう、それで果して何のためだといふ断定を下すことが出来る。

かう思つて私は何時も能く醫者の診断を例擧するのであるが、醫者には名醫と藪とあつて名醫に一度みて貰ふには三十圓とか五十圓とか、モット多額の診察料を拂はなければならぬ。藪井竹庵ならば一圓で済むが、一向に其の診断は頼みにならぬ。實際私は或名醫に聽いて見た「先生の診断はいつも確かで間違はぬが何うして分るか」と聞いた所が「君も學者の仲間入りをしてゐながら迂濶な質問を發するものだ、人間の病症が、さう簡易に分つて堪るものではない」といふ意外な答であつた。くはしい説明を聞いて始めて成程と合點したが、先づ患者の顔色を見る脈を取り心臓を叩いて試みる、さうしてゐると是は胃であらうとか腹の病氣であらうかと云ふことが、ふと直

覺的に考へ浮んで來るから、薬を調合して二日分ほど渡してやる。若し果して胃であるならば其の薬の反應がある筈なので、二日経てから再來した時に容態をきく、胸が苦しかつたか通じが有つたか否、熱の工合がどうであるか、薬は一の化合物であるから必ず反應が現はれて來る。そこで最初の判断が間違つて居つたか如何かを漸く確めるのだといふ話であつた。醫者に高い診察料を出して有難く薬を頂戴して來て喜んでゐるが、實は實驗の材料に供せられて居るのである。所が藪井竹庵は胃だらうか腸だらうか分らない、夫れを誤つて胃に相違ないなご、妙に見當をつけて、實は腸が悪いのに胃の薬ばかり與へる、一週間ばかり経ても更に良くなるので、今度は胸だらうと思ひ違へて、遂には飛んでもない餘病までを併しめることになる。其の岐れ目は診断一つにあつて、正當に判断を下せるか否かに過ぎぬ、何病でどの程度だと分りさへしたならば、薬の調合や療法は書物に載せてある、讀めば分るので私でも出來ぬことはない。農業教育を施すにも全く此の判断力を養ふことが目標で、二つ三つの智識や技

術は云はゞ末の問題である。その事實についての智識や技術を通じて、本元の心といふのか一の力を養ふのが大切である。之を念として居るのでなければ、百の説明も千の講義も餘り役に立たぬと思ふ。

## 一〇 教育の目標

### 一

教育を施すのは決して教場だけのものではない。實習場は元より其の他あらゆる時になさるべきで、校舎や校地以外でも教師と生徒と相會ふ時は皆その場所だと思はねばならぬ。浴衣掛けでブラ／＼散歩してゐて生徒と會ふ、帽子を取つてお辭儀をするといふだけでなく、其の時も一つの良い教育の機會である。さう考ふべきだと私は思ふが、高等學校の教師である或知人は、生徒を自宅へ寄せ付けるなどは面倒だといつてゐる、學校へ行つて教へるのが任務である、自宅では自分の仕事をせねばならぬと

いふのである。成るほど時を擇ばず自宅へ來られても困ることは能く分るが、自宅では面會謝絶だ、用があれば講義の後で會はうと言ふのでは、智識を切賣りするに過ぎない、少くとも親切な教育家とは申せぬと思ふ。苟くも訓育といふことを考へると教室だけで教へるのはホンの一部分で、教室以外で相互に接觸する場合に却つて好適な教育の機會は與へられて居る。それを利用し活用しないのは甚だ残念の次第である。

### 二

茲で更めて教育學說を受賣する必要はないが、人間を造るのが教育だと確信するやうになつたのは割合新しいことで、歐羅巴でいへば、謂ゆるルナサンス以後に闡明された。それまでも古い説はあつたが明確を缺き、教育とは一つの便利な役に立つものを作ることだと心得てゐた。走る事を教へて兵隊になる便に供し、鋏の使ひ方を教へて農者として役立たしめ、ハンマーを使ひ馴らして工場で働くに適するやう、さういふ風に役に立たせるのだと考へてゐた。初めて教育は人間を作るのであるといふこ



とを明かにしたのは、斯界に有名なコメニウスであらうが、此の先覺者の説などは今でも決して古くさくなくなつて居らぬ、時折に振返つて見る必要がある。人をつくるのだと分つたが、それはどうしてやつたら宜いかと云ふ方法につき、教育學上に喧しい色々な問題が表れて來た。ルソーは、自然に還れ、くだらぬ細工がわるいと云つた。ペスタロッチは、空に説明してもだめだ、現實の事物を以てせねばならぬと、謂ゆるオブジェクト、レスンといふのか、玩具を持たせ庭いぢりをさせる。フレーベルからモンテッソリ其の他に至るまで、教育の手段として如何に爲すべきかは殆ど遺憾なく説かれて居る。然し、人をつくる、といふが、其のつくられる人とは何か、性能とか人格とか難しい議論があるので、それは實に根本の大切な問題である。

## 一一 つくらるべき人

一

これに就ては色々の考へ方があるので、到底こゝに論述する時間もなく其の資格もないが、一體人の目的は何だと云ふ大きな難問にぶつかると思ふ。自分ながら實際に餘り考へぬのが一般だと思ふが、我が人間としての目的は何だと云ふても容易に分るものではない。人間以外の周圍にあつて日常觸れて居るものは大抵分る。例へば此の箱の目的は何であるか、白墨を入れる爲のものといふことはよく分る。豚を飼ふのは何の爲かといへば、仔を殖して數を澤山にし肥やして適當な時に肉とするのである。所が人間の目的は分らぬ、お前の目的は何だと聞かれてもちよつと返答が出来ない。平常なにをしてゐるかは明瞭で、毎日役所に出勤して業務に従つて居る、役人としては服務規程によつて仕事をするので、それによると文部大臣の指揮命令を受け云々と書いてある。全く大臣の命によつて動くのが私の任務であることは疑はれぬが、それぢや文部大臣の爲に存在して居るのかと云ふと、考へねばならぬので、如何に小なる力なき私でも、人として生れて文部大臣の爲に存在して居るのだと云はれては承知が

ならぬ。これでも一個の獨立した信念のあるものとして、場合に依つては文部大臣が何だと云ふ五分の魂は有つて居る。さうすれば貴様の存在は何のためかと云ふことを考へると、私は私以外の誰のためにも存在するのではなく、勿論文部大臣の爲に存在して居るのではない、自分自身の爲に存在して居るのである。即ち人間の目的は外にはないので内にあると言はなければならぬ、私の目的は私自身の内にあるといふことにならねばならぬ、内にあるとは自分を十分に完成することで、生れて人となつた以上は天分を皆が持つて居る、その天から授つてゐる所を發展せしめるのである。私は之を譬ふれば丁度植物の種子のやうなものと思ふ、銘々は一つの種子を天から授つてをる、其の種を育て、生長せしむると云ふことが人の目的である。種子には細小なものもあれば可なり大きいものもある、朝顔の如く育成すれば美しい花は咲くが唯一朝といふものもある。松のやうに目立つ花は咲かぬが幾百年數十尺に達するものもある。煙草の種子は極めて小さなものであるが、蒔いて見ると大きな葉が澤山にできる。蠶豆は

種粒に較べれば餘り背は延びぬのである。牡丹は立派な花をつけるが、果實は格別のものではなく、稻や麥の花は見るに足るほどではないが、其の種實は人の命をつなぐ。人の天分は各個で違つて居るが、夫れづつを育て、ゆくところに價值がある。稻は稻として實を登らしめ、牡丹は花を咲かせるのが本分で、われら人間の目的も全く同様だと思ふ。

## 二

斯う考へると教育上に色々注意せねばならないことが起るので、能くあの人は偉い彼の人のやうになれと訓へるが、これなどは餘程無理なことではあるまいかと思はれる。昔の儒教のやり方では聖人とか君子とかいふ一の型をつくる、孔子や孟子は後世その型になつたものと云つてよからうが、それに一步でも近付くことを教養の積んだものとした。故に「若し孔子が軍勢を率ゐて日本を攻めて來たと假定したらどうするか」といふやうなことが問題にもなつた。然れども、孔子にしる孟子にしる其の眞似

をするのが本當でないことは多言を要しない。自分の天分を延ばして行くところに修養もあると云はねばならぬ。柿の種子を持つて居る人が、それを蒔いて早く延びぬとちよんぎるぞと育て上げるのは柿實をならすためで、これに一つ牡丹の花を咲かせようと思つて一生懸命に牡丹の作り方をやつても甲斐はない。決して牡丹の花が咲かないばかりでなく、柿としての性能を發揮せぬから、何の役にも立たぬものとなつてしまふ。教育も全く之と同じものではあるまいか、彼のやうな偉い人になれと訓へるには、その意味を十分に説明せぬと飛んでもないことになる。要するに我等の目的は自分の裡にある、天分として獨特な個性がある、その自我を十分に發展せしめ完成するのである。かういふことは色々の説があると思ふが、私はイギリスのグリーンに深く教へられたので、既に何十年前前に書かれた古い本に論じて居る。コメニウスが教育とは人間を作ることだといひ、その人をつくることは自我を發揮し個性を完成することだといふことが分つたのである。

## 三

自我とか個性とかいふと全く人一人のこのやうであるが、凡そ人間は物理學的に生理學的にばかり見られないので、この社會に生活して居るものとしては孤立するとは出来ない。地球上に存在して團體の一員として共同生活をやるので、生れた時に社會が既に成立して居り、兩親を始めとして切つても切れぬ縁者の仲間となる。親父は喧しいからと云つても、隣の伯父さんは良い人だと云つても、親父と伯父さんを取替へるわけには行かぬ。而も此の社會には自ら進んで仲間入りをしたのでなく、生れ落ちるから嫌應なしに其の一員とされ、それから遁れ出ようとしても叶はぬことゝなつて居る。之はあきらめと云ふよりも覺悟を定めねばならぬ次第で、こゝに深い意義もあることゝ思はれるが、社會を離れて人と云ふものは存在しない。だから個性とか自我とは云ふものゝ物理學的に生物學的に考へられるのと違ひ、少くも社會的に經濟的に教育的に云ふ場合には、唯社會人としての意味があるのみである。近頃の教

育學說でも昔のやうな個人といふことは漸次に棄てられ、社會人としての教養を多く論ずるやうになつた。目下評判になつて居るドイツのナトルプが社會教育學などを唱へるのも、よく此の邊の消息を傳へたものと見ることが出來よう。苟くも教育である以上は、程度の高低を問はず種類の何たるを論せず、皆その根抵に此の思ひがなくてはならぬと考へる。

## 四

漢字の「教」は兒童の頭上に斜十字字××を二つ重ねて扁となし、片方に鞭(文)を置いて作られたといふ。十字字二つは複雑したこと即ち問題を意味するので、「學」字なども兩手で十字字二つを兒童の頭上に置いた形であるが、その問題を解け！ウツカリ横見などをするとお尻を打つぞ！といふのが「教」の字である。而して「育」の上は子を倒まにして下に肉月を置く、支那では肉饅頭が非常に美味しい、それを兒童の鼻先へ持つて來て「茲までお出で、來たら上げよう」といふ形を示したものである。

叩き込み釣り込み主義の昔の教育を能く表してゐるが、これは決して支那に限つたことではなく、西洋でも皆さうであつたのは云ふまでもない。所がそれではならぬ、個性を發揮し自我を完成するのが本當で、詰め込むのではなく引出すのだと、英語(エデュケーションとは外にひつぱるとの原意)の字義などを有がたがるやうになつた。兒童の持つて居ないものを横から注込み、知らぬことを知らすといふのが教育でなく、兒童それ自身の内にもつものを育てあげ、生長發展せしむるのが教育である、斯う云ふ風に考へるやうになつた。あの評判のラッセルなどの説も甚だ面白いと思ふが、兒童をして先づ獨立の考を持たしめる、他の言葉で言へば自覺せしむるのが教育の根底だといふ。さうして教師の言を唯きいて盲従するのではなく、コンストラクティブ、クエスチョン(構成的疑問)を兒童に懐かしむるのが肝要だと説いてゐるが、成程その通りであると思ふ。先に申したクリステン、コルが激勵する感憤せしむるといふのも相通じた同じ意味があると考へられる。教育に従つて居る我等は共に此の邊のことを

深く考へてゆかねばならぬと思ふ。

## 一一 農學校の使命

さう云ふ風に教育を考へると、農業教育とはどう云ふ意味になるか。無論農業者に仕立てあげるといふのが根本の意味ではあるが、實際の問題として我が邦現在の謂ゆる農業學校は其の目的に適つて居るかどうかを見ねばならぬであらう。諸君も現に奉職されて居る學校に就きて、此の邊の調査も時折やつて頂きたいと思ふが、生徒が本當に將來農業者にならうといふ固い意志で農學校を擇んで入學して來たものが何パーセントあるだらうか、恐らく其の割合は案外少いものであるまいかと私は恐れて居るので、我が農村の現状では進んで農を生涯の業務としようなど希望するものは少いらしい。たゞ小學校だけでは満足出來ない、それかと言つて大學まで進まうといふ餘裕はない、能力をも思ひ家庭の資産やその他の事情もあつて、到底ズツト高い教育を受

けられぬ——これが出来れば躊躇せずに中學に向う——せめて中等程度だけはやりたいものだ、農といふ業務そのものは餘り思はないで、兎も角も農學校が近所にもある、その位の考へで這入つて來る者が可なりの數を占めて居るやうに見える。何處の學校でも構はないので小學以上の學校へ行けば宜い、別に擇ばぬが元々農家に生れたものだから位の考へから、又中には中學の入學試験を受けて落第した、農學校ならば入れて貰へるといふ譯で這入つたものもあるらしい。而して農業學校規定に定めるところを見ると、將來農業に従事せんとする者に教育を授ける所だとなつて居るが、かういふ専門の職業教育ばかりと見られないのが今日の實際と思はれる。さう云ふ意味で我が農業學校は實際に農業に従事する者、または技術者を養成するのを主眼とするは元よりだが、其の意味でさう嚴密に限定するわけに行かないことも忘れてはならぬ。農村に生れて農家に育ち、そして農村で暮すと云ふものに中等教育を施す場所と思ふべき一面がある、これが可なり多分にあることを忘れてはならぬ。若

し之を専門の職業教育として技術者をのみ覘ふならば、日本の全體を見て現在のやうに多數ある必要はない、一府縣に一校か二校もあれば大抵間に合ふだらう。實際は現に三百幾つと云ふ數に達してゐるが、農といふことに限定しないで、たゞ單に農村に暮しゆく者に對する中等教育だと思ふべき理由がある。また眞に農業の教育を施して農業専門家を養成するのが唯一の目的であるとすれば、今日のやうに尋常小學を卒業して五年とか、高等科から續く三年と云ふやうな制度についても色々考へねばならぬことがある。寧ろ高等専門學校で謂ゆる技術者を養成し、他方にはデンマルクの國民高等學校や謂ゆる農民學校をつくり、實際に鎌鋤を執る百姓を養成すべきであらう。小學校を卒へてから農事に従つて居るが、このまゝ一生を終るわけに行かぬ、モウ少し勉強したいと思つて居る、かういふものを收容して農閑期に教育してやる、それが本當に農民を養成する所となる筈である。農閑には幾週か何月か出てもよいが、忙しい時には家で働かねばならぬ青年が多い。今日では之を補習學校でやらうとして居る

が色々不十分な點があるやうで實際には難しい、私一個の希望としては特種な此の目的に叶ふ學校を拵へたい、先年來これを唱へて漸次その空氣は醸されてきたやうに感じて居る。兎も角も現在の農學校は職業的専門の場所ばかりでなく、農村に在るものに中等教育を施すところと云ふべく、さうすると今までの學科目なり配當時間なりに餘程ちがへて考へねばならないものがあらう。文部省の方針は斯うだと今その點を明示することは出来ぬが、一つの大事な研究題目として諸君に之を提出したい。現に其の局に當つてゐらるゝ諸君が、先づ十分考へて案を出されんことを切望する、さうしたならば及ばずながら熱心に其の實現に骨折る積りである。

### 一三 實際の業務

學科目その教授時數といへば、問題は澤山あることゝ思ふが、第一に殆ど疑ない點と考へらるゝのは、今の所で學科目その時間ともに可なり少く減じたいことである。

生徒には其の邊で負擔を減少してモット自由に勉強させたい、學校で何も彼もやらせなければならぬと思ひ、又やらせ得ると考へてゐたが大きな誤りであつた。モウ少し學校當局者は謙遜な態度で、學校以外の觀察經驗殊に家庭に於けるものを利用するやうに、實際の業務は學校で監督しても容易に徹するものでないと思ひたい。親の手許で利害關係の密接なところで其の事業に携はることが、何といつても最も有効であるから教師よりも父兄の監督に價值がある。尤も家庭で實業の手助をしてゐるのを教師は知らぬ顔をしてゐるのでなく、常に其の業務に入り込んで指導し注意せねばならぬ。農學校は農家の子弟が多いのであるから、その地方は農事の繁閑が大抵似たものであらう、忙しい時に授業を休んで家庭でやらせる、而も學校でやらせる代りに家でやらせると思ひ、常に生徒の働き具合などに注意するのである。何でも學校でやらせようと思へば實習地も廣い面積を持たねばならぬが、家庭で少からぬ部分をやらせると定めたらば左程に大地積を要すまい、家で忙しい時に父兄と一緒にやらせたら宜いので。

それを報告などを徴するなり記録を取るなり、監督もできよう指導することも難しくはあるまい。さうしたならば多くの父兄は非常に喜ぶであらうと思ふが、學校にやるのはよいが忙がしい時に困ると云ふ家庭は少くないと思ふ。従前のやうでは農繁期に折角役に立つ年頃の青年をもちながら、その時は學校も忙しいので平常よりも晩く疲れて歸る、而して學校では本當に役に立つやうに働いてゐるか知らず疑つてゐるのだ、今後はモウ少し學校が謙遜な態度で家庭を重んずると云ふのが必要であらう。

## 一四 設 備

また何時も能く問題になるのは設備で、博物の先生は澤山な標本を欲しがり、化學の教師は色々の藥品を十分に備へたがる、それは何れも必要に相違ないが、内には随分無駄もあるらしい。私は方々の學校を視て歩く、短いのは五分か十分間、三時間も居ればユツクリの方で半日一つ學校で暮すことは珍しい。それで批評するのは當を失

することが多からうが、金を掛けて標本を澤山に買つて居る學校が必ずしも良いと云へないので、島津製作所あたりの標本を陳列してゐながら、塵まみれで餘り教室にも運ばれず利用される機會の少いのが多い。擔當の先生が骨を折つて採集作製した所では、金は餘りかゝつてゐないやうだが一般に甚だよく活用されて居る。さう云ふ事實を多く見るので標本は無論買はねばならぬのもあるが、成るべく買はないで作る位の人には能く利用する、さうでない人はたゞ列べて置くだけに止まるのが多いらしい。それで私は寧ろ設備には餘り重きを置かない、これは財政と關係することで經費が許せば元より希望するが、設備さへあればよいやうには考へない。出来るだけ良い十分な設備を願ふが、備らぬ部分は夫れで出来るだけのことをする。設備があれば立派な教授をするがどうも不完全だから出来ぬなど、と言譯にするのは取らないのである。

## 一五 教 材

教授の項目も兎角に多過ぎるやうでもあるし、まだ要らない事を随分やつてゐるかとも思はれる。或東北地方の學校であつたが、メロンの講義をやつて居る所を參觀したことがある。その先生は静岡縣の人で經驗もあつたらしく、特に郷家の温室で栽培した果實を小包で取寄せ、實物について詳細に教授をしたが、何でも二時間の豫定で實は少くも三時間はかゝるらしかつた。私は折角だが此の邊でメロンを説くのは十分か二十分でもよからう、全く無駄な時間を費してゐるのではあるまいかと思つた。成るほど五年か十年後になれば此の地方でもメロンを栽培するかも知れない、それまでは餘りくはしいことを述べても役には立つまい。その卒業生が實際メロンを手にかける時分には、需要も變つて品種も違へば栽培法も變るかと思はれる、その時になつて學校のノートは役に立たない。教場で細かに説明するよりも、必要に應じて書物を調べ得る、その力の養成に意を注いで行くことが大切である。

また能く見るのは苹果の品種などを教へるのに、私は能く知らないが紅玉がどうだ



とか何號がどうであるとか、而も内地では斯う云ふ名前を付けるが、北海道では何號と呼ぶなどと詳しい説明をする。繪で示すばかりでなく、此所は少し丸味が違ふなどと不完全な標本で説いてゐるが、仰山に云へば愚の骨頂で品種の見分は決してソクナことで分るものぢやない。苹果を栽培せぬ地方で其の樹を知らない生徒に、その詳しい教授は要らないので樹姿を述べても分らぬから、教科書には載せてあつても思ひ切つて省けばよい。交通發達の時代であるから朝鮮なり青森なりの産品は季節に何處にも來る、その時に商店から三つや四つの品種材料は得られやうから、それを示して寫生などさせ一つ宛食べ較べさせると最も妙、實物を離れての説述は如何にも頭に這入り難いので、試験の爲に覺えても直ちに忘れてしまう。其の地方の梨なり桃なり柿なりに就て、品種といふことを十分に納得せしめる、珍奇なものは出遭つた時に調査することの出来る力をつけるのが肝要である。どこでも其の地方に普通ある品種の數は大抵限られて居る、五種くらゐで十種に及ぶものは少なからうが、この少數の品種だ

けは何時何處で手にしても直ちに見分けられるやうにする。それで十分で生徒が卒業してから他の地方にゆけば、また其處に普通ある數種を直ちに覺える事が出來よう、學校で教へて置かないと卒業後は何も新に覺えぬかのやうに心配するには及ばない。さういふ點で無駄な時間を費してゐることは、今までの學校で實に多かつたらうと思ふが、教科書の普遍的に出來てゐるのは仕方があるまい、各その時處に應じて取捨するのは教師の任務で、補足するばかりでなく時に思ひ切つて削除するがよい。また學校の卒業生は必ずしも其の地方にのみとゞまらないので、卒業してからは北海道に行くのもあらう鹿兒島に行くのもあらう、その時に困つてはといふ親切は甚だ結構であるが、南洋熱帯にもゆくかも知れないシベリヤの寒地にも行くだらうと、到底はてしない相談であらうと思ふ。そんな親切よりも何處に行つても、新しいことは其の時に自分で調べ出すといふ自信を持たす方が優つてゐる。親切はよいが過ぎては虻蜂とらずになる。二兎を追うて一兎も取れぬのは普通で、効果の擧らぬやうではならぬか

ら思切つて減少する理由が起る。害虫や病害に就ても同様で餘り澤山に教へ過ぎる、聞くものはそれが大切でそれが普通なものか分らない。現に私は此の大學で學生として一年の終頃大いに考へた事がある、三年の卒業前の優等生が下宿してゐる家で、庭に大根を播いてゐたが丁度夏前の試験の頃は數葉出てゐた、頻りに飛んで廻るものを紋白蝶だと云つて騒いでゐたが、暫くすると小さな虫が出て葉を食ひ始めた處、その優等生は驚いて何だか分かぬ。私は田舎に育つて紋白蝶など、いふ名は知らなかつたが、大根類の葉を害する虫は見馴れてゐた、また昆虫は一年の課程で試験勉強のしたてであつたから、どこに産卵して如何なる變態をするかは分つてゐた。その時に暗記して答案はよく書いても、實際に紋白蝶が一つ分らぬやうでは、農學士として試験場の技師になつたら怪しいものだと思つた。私は以來暗記をせぬことに定めて成績は一層わるかつたが、その感懐だけは近頃になつて考へ直しても違はない。自分の不出來を今更辯護しようなどは決して思はないが、何故かういふ結果になるかと云ふと、

澤山に教へ過ぎるから學生は輕重が分らないので、たゞ暗記して試験の間に合はせる實物を見ても分らぬと云ふことになるのだらう。農學校などで害虫を教へる場合などは、その地方に極めて普通の物だけ大體種類を揃へて置けば宜い、それだけは遠方から飛んで來るのでも分る、害を受けた葉を見ても分る位に三つでも五つでも徹底して覚えさせる。本にあつても該地方に餘り見られないものなどは省いてよく、其の代り新しいものにぶつかつたら其の時に研究するやう、その調査の方法や見るべき書物などを授ける。病氣や害虫などは教室で多く説くよりも、生徒の自學に待つて採集などしたのを指導してやるがよい、在學中に多少自分で觀察し研究するやうに習はしめねばならない。

## 一六 實習精神

## 一

次に實習に就いても問題は色々あるが、矢張り先づ設備を要求する人が多いので、出来るなら十分に致したいが實際はさうはゆかない場合を常とする。地積なども生徒一人當何畝歩などと計算して、何反歩、幾町歩がなければならぬやうに考へるが、私は必ずしも其の必要はあるまいと思つて居る。農學校であれば校地の全體を實習地であると考へたいが、能く見受ける事實は實習地の草は綺麗に取つてあつても、寄宿舍の横に植えてある樹は一向に注意されて居らない。さう云ふ學校に行つては訓練が行届いて居らないやうに感ぜらるゝので、大概は門から玄關前に立つた時の氣持で學校の全體の様子が分るやうに感ずる。と云ふのは決して綺麗に掃き清めてあるとか立派に庭がつくつてあるとか云ふのでない、實習地に於ける作物や家畜に對する精神の一

面を窺ひ見るのである。作物を栽培し家畜を養ふには愛するといふ心情が根本で、この心の養成が教育の主旨となる。農業趣味を養ひ農村生活を理解することは、要するに茲にあつて技能や智識を授くるのが決して主眼ではない。たゞ作物を植ゑるにはどれだけの間を置くとか、肥料は反當何貫を施すといふことのみでは、到底この教育の目的を遂げて眞の心を養ふことは出来ない。農場で作物の生育状態を見る同じ心情が、校庭の草木に對しても矢張り働かなければならぬと思ふ。其の心が庭木に對して起らぬやうでは利己主義とでも云ふべきであらう、收穫のみを考へればさうかも知れぬ。苟くも人格を養成し品性を陶冶するなどと云ふには、十分に此の邊のことを思はねばならぬことゝ信ずる。先頃も九州の或學校へ寄つて色々な話を聞いたが、その數日前まで早魃で圃場は全く色を失つてゐたさうで、久しぶりの甘雨で稻の色などは見違へたといふことである。夏休中ではあるが校長は毎日登校して案じてゐた、その雨の降つた翌朝は嬉しくてしやうがない、校長室に控へてゐても落ち着いて事務を執れぬほ

ごで、農場主任が何とか云つて来るだらうと心待ちにして居つたさうだ。やがて大分遅くなつてからやつて来たが、いつもの定つた事務だけを報告して行きかける、昨夜の雨の心持は更にならないやうなので覺えず腹が立つて吐りつけたといふことであつた。稻その他の作物に對する深い同情といふのであらう、下役を叱るのは餘り感服せぬが私は其の時に全く校長と感情を同じうしたのである。農業教育に従つてゐるものは相互に、水田を作つて早魃で弱つて居る時など、決して單に利害關係からのみ心配なのでない、實に稻に對して氣の毒で放つて置けぬ氣が起るのである。我が子の病んで苦しむのを見ると同じやうな、程度に差こそあれ全く異ならぬ同情が起るべき筈である。今話したような場合に、農場主任は「雨が降りました田が見違へるやうになりました」と、飛んで来て分り切つたことではあらうが、いち早く報告したら、校長も喜び満足したに相違はないので、これは利害でもなく上官に對する責務でもあるまいが、外に漏らさずには居れぬ同情の心それが貴いものだと思ふ。勤定と義務だけの心掛では、

決して優良な農場主任と云へぬと考へられるが、さう云ふ人が實際未だ少くないのは残念である。

## 二

農場などに關係する教師は殊に朝も早く出ねばならぬこともあらう、晩は遅くならねば歸れぬこともある。誠に氣の毒な職務とも思ふが樂も亦その中にあるので、時間に拘泥しては自然を相手にする農事は良く參るまい。私は進んで其の點は農事ばかりではないやうにも考へるので、時は十分に尊重せねばならぬが利用すべきで束縛されてはならぬと思ふ。勝手のことでは茲で申して誤解されては困るが、私は役所に通勤してゐるが必ずしも朝は九時から午後四時まで居るとは定つて居らない。上官でも下僚でも他が期待する時には出て居らねばならぬが、場合によつては晩く出て早く退去する。その代りに必要に應じては夜おそくまで留まり、時間外であらうとも日曜でも休日でも苦とは思はない。この點では公私とか内外とかいふことを餘り區別せず、謂ゆ

る務めるといふ心を去つて英語でいへばインテレスト（趣味）でやる氣でゐたい。決して自慢する積りはないが一つ聞いて頂きたい、人間の感じか氣持は可なり強いと云ふことを考へた經驗がある。

やはり鹿兒島に奉職してゐた頃のことであるが、私は能く他へ出張して居らぬ時が多かつたのに、或夏の休み中珍しく鹿兒島で暮してゐた。家にブラ／＼寝轉んでゐても仕方なく、朝から魚を釣りに出かける道樂もないので、平常のやうに學校へ行つて生徒も居らず、これといふ仕事もない静かな境地を喜んでゐた。所が或日何か一寸したことで學校へ行かないでゐると、とかく間の悪いもので、丁度その日に遠方の友人が訪ねて來た。受付の給仕が書記に相談したさうだが、書記は「小出さんは今日學校に見えて居りませぬ、無論自宅にも居られませんまい、學校へ來ない位ですから鹿兒島には居りますまい」と云つたのである。實は私は其の頃は自宅に居つたのであつたが、さういふ話で友人は失望して歸つて行き、私も後で聞いて大變に残念に思つた。頼み

もせぬことを言つたのではあるが、書記や給仕までが能く私の心持を了解してゐたのは有り難く思ひ、病氣でなくて學校へ來ないのは市内に居らぬ、何處かへ行つたに相違ないとまで考へたのは、其處に面白い意味があると自分ながら満足したのである。學校へ毎日行くといふ夫れ自身は何でもない、さう云ふ氣持になることが價值あるので、勤め場所だといふだけでなく、其處に常に愛着を感じて居る、その心がなければならぬ。單に表面の責任といふのみでなく、自分のもの生活の一部とでもいふ氣になり、他人のものを務めてやるといふ心を去る、さうせずには居られぬといふ所に貴いものがある。

## 三

先年和歌山へ初めて行つた時に、兼て希望してゐた有名な蜜柑畑を諸所で見せて貰つた。御承知の通り蜜柑は歐羅巴では作られないで栽培上の研究も餘りに發達しないであつた。亞米利加のカリフォルニアは盛んだが、云はゞ處女地に肥料などの苦心も左

程なくて起つたのである。梨や葡萄や苹果や桃等に比べて剪定その他の研究が、蜜柑に就ては極めて幼稚なのである。其の意味で私は紀州蜜柑の栽培に大なる趣味を感じて居るが、元來各國に於ける農業の歴史や地理を多少調査してをるので、紀州の蜜柑畑は初めて見て非常に感ずるところが多く、成程蜜柑栽培の研究は世界獨得のものたることを知つた。殊に剪定は今までの方法に較べて大いに違つたものを實施し、大いに斯學のために誇るに足るものと考へて居る。かういふことは實に嬉しいので、私も一二度西洋農學者の前で我が技術の優つた點を説明したが、日本では斯う云ふ進んだことをやつて居るぞと威張れるほど愉快なことはない。和歌山で諸方を案内されたちで、或老農の蜜柑畑を訪ねて自慢話を聞いたが、その談話は實に貴いもので三冊や五冊の讀書に優ること數等と思つたのである。その多くを茲でお分けするわけにはゆかないが、その一つだけを話せば斯ういふことであつた。曰く「他の人達は畑を一枚としてのみ思ふやうだが、私は樹を一本つつ戸籍をつくつて居る。だから何處の畑の

南から何本目の樹は枝振りがどう云ふ風であると云ふことをチャンと覚えて居る。」かういふ次第で頗る得意なものだが、段々に話をして行く内に肥料の話も出た。近年は試験場の技師に頼んで調合して貰ふが、それを大抵の人達は、畑に一面バラ撒いてすましてゐる。あれちや相手かまはずで本當の養料にならない。私は一本づつ樹と相談をして肥料をやるから少しもすたりがない」と話した。私は此の言葉にすつかり參つてしまつたので、蜜柑を唯の植物と見て居らぬ、對手といひ相談といひ言葉が自然に出てきて、全く氣取つて云つたのも何でもなく、人間であるかの如く考へて取扱つてゐる。戸籍を作つて顔かたちを心得てをり、一本づつに就いて相談する。「お前は何がほしいかね、窒素分は餘り要らぬやうだな、その代り磷酸を少し多く上げようか、それとも加里が希望かね、いや水を澤山飲みたいのか」と云つた調子である。一本づつ剪り方が違ふ通りに肥料のやり方も異なるべきは當然で、たゞ反當何貫といつてバラまくやうなことをせぬ。當り前のことではあるが、樹と相談をしてやるといふ言葉

に、老農の老農たるところが表れて居る、此の言葉が自ら出てくる其の心が貴いと思ふ。教育といふことは尙更さうで、學級一まじめに講義ばかりしてゐるのは相すまぬと考へるが、最も大切なことは何とかして此の老農の心の一端をつくらしむることであらう。唯單に白いとか黒いとか、曲つてをるとか眞直だといふことを知らせて足れりとするのでなく、さういふ事實によつて精神をつくるのが教育である。

以上は私の考へる農業教育の概要である。時間の短いところで亂雑の話をしたのに過ぎないが、プリンシプルが那邊にあるかを一考して戴いたなら、實際その局に當つて居らるゝ諸君のことであるから、實地に當て箴めて然るべく取捨して下さるだらうと思ふ。若し間違ひなり不十分な點があれば遠慮なく補正し、其の旨を御教示願ひたいのであります。

(昭和二、八、十四 農業教員講習會にて)

## 後篇 農村教育の諸問題

夫れ大地は人類の本居にして、山嶽平原は第一の寶藏なり、池澤河海は第二の寶藏なり、人世日用の諸物は皆この二藏より出づ。……………

謂はゆる老農老圃か不可生の物を不可生の地に生じ、不可熟の品を不可熟の時に熟さしめて、天機を縦にし造化を奪ふの妙をなすものは皆この手段を行ふのみ。……………

近來は何れの國も豪富なる民を尊敬して甚だ貧窮なる民を輕蔑す、是れ大なる誤なり。如何となれば、貧民は國家の害をなすこと少し、然るに豪富なる民に至りては國家の禍をなすこと極て大なるものなり。……………その富盛なる勢に乗じて數十家の産を兼併す。……………

佐藤信淵『經濟要録』

## 一 農村教育に就て

農村教育と云へば、一口で分つたやうであるが、實はボンヤリして居る。それをくはしく説明して居ると長くなるから、茲には假りに農村に生れて生きてゆく人に對する教育と云ふことにしておく。

それで、農村とはどう云ふ處か、其の村の住民の多數が農業に従事して居るのは言を待たぬが、農村であるからと言つて、其の村人が悉く農業に従事して居ると云ふやうな所は甚だ少い。山間の偏僻な所に行けば随分無きこともあるまいが、普通に其の邊に見られる農村は、大部分は農民であるとは云へ、農業をやらない者も住む、さう云ふ處なのである。

現在、我邦に農業學校と云ふのは随分澤山出來て居る。今日では三百幾つと云ふ數



に達して、盛んと云へば可なり盛んなのであるが、此等の農業學校が果して能く農村教育の目的を遂げつゝあるか。それに就いて色々の批評もあるやうであるが、其中で、どうも農業學校の卒業生が家に戻らないで月給取りになつて了ふ、偶々戻つて來るが、家の用事をさせて見ると碌なことが出來ないと云ふ非難がある。此の非難の無いやうに農業學校を改めて行かなければならぬことは勿論であるが、一面から見ると是は當り前のことではなからうか、寧ろ非難する方が見當が違つて居るのではないかと思はるゝ點がある。

農業學校であるからと言つて、普通の今迄の考へに依ると、農業に關することは有ゆる事柄を教へようと努めたが、農業以外の事は餘りやらないと云ふ遣方であつた。所がさう云ふ教育を受けて出て見ると、農業の技術家としては成程相當に働き口も利けるが、農村に歸つて家の仕事をするとなれば、單に稻を作るとか豚を飼ふとかいふ農事だけでは務まらないのである。

思ふに高等の教育のことは元より云ふまでもないが、中等程度でも小學校を卒業してから四五年間、進んだ教育を受けることの出来る人は、どちらか云へば村でも資産あり地位の高い方に限られるといふ状態で、さう云ふ人が家に歸つて來る。長男であれば親ゆづりの地面で百姓をすることが出来るが、大概は自分で鋤鋤とつて耕作するのは一部分に過ぎないで、所有地の大部分は小作に出すといふ事情がある。さうして段々働いて其の村で信用を得るやうになれば、直接の農事ではない、他の色々な村の仕事をしてさねばならぬやうになる。或は組合のこと或は役場の仕事に關係し、進んでは村會議員になる、縣會議員になると云ふやうな位置に進んで行くのである。又さう云ふ位置に立てないやうでは困るのであつて、さうでなければ一村一郷の指導者になつて行くことは到底出來ないと思はれる。かう云ふ風に折角農業學校で教育を受けたが、家に歸つてからは一生の仕事として農業ばかりやつて居られない。役場の事だの産業組合の事だの、或は府縣會に出て政治にたづさはる。而して、それ等の仕事を

農業學校で習つたかと云ふと、今迄の農業學校では餘り教へて居らぬ。農業學校ではどうすれば豚が肥えるか、どうすれば稻が出来るかと云ふことを習ふのである。であるから、學校で教はつた事と學校を卒業してからやらなければならぬこと、違ふ譯で、是はどうもどちらが悪いかわらぬが、學校其のものが悪いか出てから後にやる仕事が悪いか、兎も角も實際はかう云ふ矛盾があることを考へなければならぬ。そこで、今迄の農業學校の卒業生が家に歸らないのは、一概に悪いと云ふことは出来ないだらうと思ふのである。

抑も農業學校の本當の目的はどこに在るのか。今迄の農業學校が間違つて居つたか正しかつたかは別問題として、どうも其のやり方と村民父兄の期待とは合致せぬ點があつたやうに思はれる。詰り農業學校であるからと云つて、農業の技術を教へ農業の經營を教へる事に止まるならば、日本のやうな小さな規模の農村に歸つて仕事をする

には、何う云はうか、少し學問が高過ぎたか、専門に過ぎたものであつたと思はれる。實際に農業に従事するといふ、日本の現在の農村の子弟を送つて教育する場所として、今迄の高い $\parallel$ と言つても専門學校のことを云ふのではないが $\parallel$ 中等學校の程度も専門過ぎたではないかと思ふ。所が、從來の農業學校では立派な技術者を養成しようと思つて居つた。それを爲さなければ郡や縣の技手にするには都合が悪かつたのであるが家に歸つて二町步とか三町步の百姓をするには適しなかつた。殊に次男や三男で耕すだけの地面を持たぬものがある、他に職を求むるより外に行き所はない。之をいけな $\parallel$ と言つた所で、決して卒業生の罪ではないと思はれる。

夫から、折角學校を卒業しても役に立たぬと云ふ非難も、私は餘程無理ではないかと思ふ。一體學校の教育と云ふものは、卒業後直ぐ役に立つやうにするのが宜いかと云ふと、無論私は役に立たない人間を作れと云はないが、直ぐ役に立つやうなことを

目的としては碌な教育でないとも考へられるのである。學校と云ふものは、卒業したてには役に立たぬのが本當かと思ふ。そこは今の學校教育と昔の徒弟訓練と違つた所であらう。昔は大工なら大工の家に行く、左官なら左官の家に行つて朝から晩まで教はつたものである。徒弟は初は兒守や拭掃除に使はれ、随分長い年期をつとめて後に漸く一本立になつた。それまでには同じ事を幾度となく繰返し練習したのであるが、學校はさう練習を積む時間もないし、それよりも原理原則を納得せしめようと努める。術よりも其の生徒の人物をつくる、其の性能を發揮せしむるといふにある。學校教育の目的は此處にあるから、卒業して直ちに役立つことは寧ろ難しいと云はなければならぬ。然るに、世間では役に立たぬと非難するから、意氣地のない校長は何でも卒業したら直に役に立つやうに教へ込まうと骨折つたものもある。それで、卒業した當時には役に立つものも出来ないではないが、それ切りで三年五年経て世の中はズン／＼進んで行くが、一向に進歩せず却つて間拔けたものになるのが少くない。茲で教育

とは何ぞやといふ問題が起る、少しばかり教育の議論を許して頂かねばならぬ。

實は私も専門家ではないが、抑も教育といふ支那の文字は××と十文字を重ねて二つ書き、其の下に子供の子を書いて扁とする。此の十文字を二つ書いたのはどう云ふ譯かと云ふと、支那で文字を造つた慣例は、何でも面倒臭い複雑した事を示したのである。即ち子供の頭の上に難問題を載せた形で、その解釋をせよといふのである。旁の方は文とかくが、是は棒の先さに紐が付いた鞭を表してゐるので、學校には今でも大抵は教鞭を備へて居るが、鞭と名のある通り、昔は之で兒童を打つたものである。詰り難問題を子供の頭に載せて置いて其の横には鞭があるといふのが教の字である。之に付て古い支那の繪を見たことがあるが、先生が机の上に書物を開き威儀を正して坐つて居る。其の前に生徒が先生の方に背を向けて立つて居る。さうして其の生徒が本を暗誦して居るらしいので、「子曰く」と云ふやうなことを讀んで居る。友あり遠方よ

り来るまた悦しからずやと云ふやうなことを讀んで居るのである。間違なく之を讀んだならば先生が宜しいと云ふ、下手に讀むと背から鞭を以てお尻を打つ。さう云ふやり方である、知らないことを叩き込むと云ふのが、漢字の教といふ意味である。育の字も矢張り似たやうな意義ださうであるが、上の云と云ふ字は子の字を倒さまに書いて居るので、下の月は天空にある月ではなくして肉月である。即ち子供の鼻の先に肉饅頭をブラ下げた所である。今日でも能くやることで、ヤット歩めるやうな子供に菓子などを見せびらかして此處までお出でと云ふ、其處まで行つて呉れるかと云ふと呉れない、もう一步下がつてまた此處までお出でといふ、随分罪の深いことである。之が教育だといふのであるが、此の思想は決して支那ばかりではない、西洋でも昔は皆さうであつたのである。

私は英吉利で或古い中學校を參觀したことがあるが、現に五百年も経つたといふ建物が残つて居て、柱など曲つて居る所を非常に自慢さうに保存して居る。校舎を方々

案内せられて行くと、講堂の正面に紋がつけてある、あんまり感心せぬ妙な圖案であつたが、紋の下の方に一行の文句が書いてある。ラテン語だといふことだけ分かるが讀めない。是は屹度偉い金言が書いてあるに相違ないと考へたから、マア聽くのは一度の耻だ、日本に歸つてから斯ういふ話の折にペラ／＼と暗誦して見せる材料にしようと思つて、是は何と云ふ意味であるかと聞くと、案内して呉れて居る校長さんが笑ひ出したから、失禮な奴だと少し腹が立ちかけたが、之は斯ういふ意味である。其の説明を聞いて見ると「鞭を吝む者は良教師に非ず」と云ふ文句であつたのである。子供が可愛相だからと云つて、出来ない子供の尻を擲らないやうな先生は良い教師でない成程と笑つた校長さんに對して立ちかけた腹も立たなかつたが、昔は教育と云へば何處でも知らないことを教へてやることだと考へて居たのである。今日では段々思想が進んで来て、それではいけないとなつて來たと云ふことである。

夫れは兎も角も、元來教育と云ふことは役に立つやうにしようといふので、西洋でも教育の要旨は三つのR——讀むこと書くこと及び計算すること、此の三つが教育の本旨であつて、それさへ出来れば教育は完うしたと云ふのであつた。所がダン／＼やつて見ると、成程讀むこと書くこと算盤をすることは大事なことではあるが、それだけでは満足することが出来なくなつた。忙がしい者は十分に學問は出来ず、閑のある者が深い教育を受けることになつた。西洋でも日本でも一番學問をして勉強したものは坊さんである、それから侍である。武士は戦争の有る時こそ忙がしいが、戦争の無い時は扶持を貰つて生活して居た。それで、學問と云ひ教育と云へば僧侶や侍や世俗と離れた閑人のやることで、日常の平凡なことでない事柄を研究する。何でも靜かな山の中にも行つて、難しい書物を澤山讀まなければならぬといふ風に考へた。だから、學問と云ふものは世の中と離れたことの研究で、教育を受けると云ふのと、世の中の役に立つといふこととは關係が薄くなつた。謂はゆる空理空論を快しとするに至

つたが、夫れに對しては大に反對論が表れて、我が邦でも徳川時代には究理學派と云ふに反對して實學派といふのが起つた。何でも實際に役立たなければならぬ、それどころ學問の甲斐もあり教育も必要なのであるといふ風に、教育の主義なり學說なりに種々變遷はあつたが、今日の所では教育は決して僧侶や特殊階級の獨占すべきものでなく、實際生活を離れては學問も効がないことはいふまでもない。然し、直に間に合ふやうに、知らぬ事柄を澤山に叩き込んで覺えさせるといふことだが、決して教育の本旨ではない。

實利効益は教育の目的ではなくして、人物を造り上げればその結果として役に立つと説くのである。技術や智識はそれを唯一の目的とするのではない。それを教へて人物を磨き品性をつくるのである。人さへ出来たら其の結果として智恵も働き技能も役に立つといふのである。今こゝで澤山の學者の名前を擧げて、色々の學說を述べる必要はないと思ふから一切省くが、たゞ人間を造ると云ふ、其の人間はどうするのがよ

いかに就て少し述べなければならぬ。

抑も人間は此の世にあつてどうなればよいのか、即ち人間の目的は何ぞと、斯う云ふ大きな問題になつて来る。もう少し大きく云へば人生の目的といふことになる。人生の目的と云ふことに付ては非常に難しい説がある。大分聞いて見たが私などの俗人には能く分らない、結局自分勝手に分り易く説明する外はない。例へば、茲にある蠟燭の目的は何ぞ、暗い所で火を付けて明るくする。コップの目的は何ぞ、水を飲む爲の物である。豚の目的は何ぞ、太らして殺して肉とするのが目的である。さう云ふ風に考へて、私自身の目的は何だと考へて見る。今私は文部省の役人をして居る、文部大臣の指揮命令を受けて働くのである。それで私は文部大臣の爲に存在して居るかのやうにも思はれるが、本當にさうかと云ふと、一寸の虫にも五分の魂と云ふわけで、何處かに承知しない點がある。成程文部大臣の指揮命令を受けて喜んでやつて居るけれ

ども、文部大臣の爲に存在して居る人間だと云はれては、是でもと云ふ氣が起る。それならば私は抑々何の爲に存在して居るのか。私は誰の爲にも存在して居らぬ。若し宗教的に神の爲に存在して居ると云はれたら頭が上がらない。其の以外には何人の爲でもない、私は私の爲に存在して居るのである。

さうすれば自分と云ふ者を飽迄立派に仕立上げることが私の目的である。斯う考へて私は、人間の目的は豚や蠟燭とは餘程違つて居る、外の誰の爲でもなく、銘々自分の内に目的があるのである。即ち自我を發揮し個性を完成するといふことに歸する。修養もそこである、教育もそこである。考へて廣く世間を見ると色々な人が居る。偉い人もある、その偉さが千差萬別である。私も人として生れた以上は一度は大臣にもなつて見たい、大將になりたい、大金持になりたいなど思ふ事がある。併し實際大臣大將になれるかと云ふとなれさうもない。他の人のなつてゐるものに自分は成れぬと思へば残念だ、詰らないと云はねばならぬ。詰らないと考へれば此の世に生きては居

れなくなるが、又考へて見ると甲斐がないと言つて死んだならば詰らないやうな氣がする。そこで迷はざるを得ないのであるが、私は次のやうに考へて居る。吾々人間として生れて居るのであるが、元來私は好き好んで生れたのではない。殊に私は自ら此の日本を選んで生れた譯ぢやない、又親を選んで此の私の苗字が氣に入つたといふ譯でもない。どう云ふ因縁か知らないが、某縣の何村に生れて來た。そして生れた時は兩親が既に定つて居た。祖父さんもあれば姉さんもあつた。自分の祖母さんは白髪頭だから嫌ひだとも云へぬ。兄さんは意地が悪いからと云つて仕方がない。それ許りか自分の後には弟が生れる、妹が生れて來る。妹はもうチツト可愛い顔をして生れて來れば宜いと思つてもどうすることも出來ぬ。私が大將や大金持になれないと云ふこともちやんと運命付けられて居る。地團駄踏んでも今更どうすることも出來ないと考へられる。かく云ふのは、運命が定まつて居るからなるやうにしかならぬ、勉強も要らぬ修養も要らぬと云ふのではない。

私は人間は譬へれば丁度一つの植物の様なもので、各自が種子をどこからか授かつて生れて居ると思ふ。其の種子は色々あつて小さな粟粒のやうなものもあれば、蠶豆のやうなものもある。松の木の種子などは吹けば飛ぶやうなものであるが、植付ければ立派な大木になる。牡丹の丈は低いが立派な花が咲く。粃種子を蒔けば、花は立派でないが一粒萬倍になる。種子は皆ソレソレ違ふので、其所に銘々の價值がある。稻の種子を蒔いて、それを幾ら茄子にしようとしても出來ない。無理に稻に茄子作の手入をすると、枯れるだけのことであらう。人間も同様であつて、自分は一つの種子を持つて居る。此の種子を抛つて置いたら萎びて枯れて了ふ。之を地に播いて育てなければならぬので、それには水もやらなければならぬ、肥料もやらなければならぬ。胡瓜は胡瓜、南瓜は南瓜、茄子は茄子に育てなければならぬ。そこが大事な所である。人間は棺を覆ふて定まるのであるから、今から心配するのは決して得策ぢやない。私||牡丹や松を強て望まぬ、路傍の雜草に過ぎぬかと思ふが||は自分を發展させて完成さ

せる外はないので、名も知れぬ一本の草でもそれ相應の花はある。牡丹にも見られず松にもない獨特のものがある。その獨特を十分に發揮したら私は満足である。此の私の獨特といふ所を味ふのであるが、私にも皆さんにはどうしても出来ぬ點がある。生意氣なことを云ふなど仰せらるるならば申上げねばならぬが、私には子供が四人ある皆さんは如何にござれようとも私の子供の父たることは決して出来ない。私のやうな下らない者でも、此の四人の父としては天下唯一である、なか／＼馬鹿にならぬものだと思つて居る。

斯う云ふわけで相互に人は何れも其の人でなければならぬ獨特の個性がある。それを研ぎ上げて完成するのが教育であると思ふ。かう考へて來ると、農業教育に就いてもお前は農家に生れたから農を習つて、一生涯農業に従事しなければならぬと云ふやうなことは、何人も命令を下すことが出来ないこと云ふ結論になる。自分が大きくなつてから、何になるかと云ふことは親も先生も決めることが出来ない。自分の本性によ

つて自身に決めるの外はない、勿論自身が決めるから抛つて置けと云ふて放任して置いてはならぬ。茄子になるべきものが牡丹にならうと考へることがあるから、お前は牡丹になりたいと思つても元來茄子だと云ふことを教へなければならぬ。農村に生れたからと言つて皆が茄子になるべきだと速断してはならぬ。農村から牡丹が出てはいかぬと言つてはならぬのがある。

それならば何故に農村の子弟に農業教育を施すのか、殊に何故に農村の小學校で農業科などと云ふのを教へるのか、之には又別に深い意味がある。何も農村に生れた者が皆農業者になれと云ふ道理はないが、農村は農業の行はれて居る所である。其の中に生れ其處に育つた人間であるから、其の環境を先づ知らねばならぬ。境遇を了解する爲に是非とも農業を多少知らねばならぬ。毎日耳目に觸れて居るといふ許りでなくそれを中心として出来てゐる社會だから、農事を教材として初めて十分な教育が出来



る。さう考へて小學校の農業科の意味が深くなるので、お前は農夫になるから農業科を學ばねばならぬといふ許りでなく、「お前達は世間に立つて役に立つ時代に適應した人物にならなければならぬ、それが爲にはお前自身を十分に伸ばさなければならぬ、それには算術も讀方も書方も皆必要であるが、お前達の生れて育つて居る此處は農村だ、農業に依つて生活して居る所であるから、農業を相當に知らねばならぬ、又自然の生物を養育することは誰にもであるが、殊に農村のお前達自身を伸ばすのにこれ程よい材料はないのだ」といふ氣持で農業を課する譯なのである。

また斯様に述べるとそれは怪しからぬことを云ふと思はれる方もあらうが、農村から農業以外の事に従事する人物を出さなかつたならば國が潰れる。何處の國を見ても何處の歴史を見ても、都會から偉い人間が出て居ない。農村に生れ農村に育つて、農村以外に活動する立派な人間を出すに云ふことは農村の使命の一つである。社會の文化を發達せしむる所以である。農村の使命は何ぞやと云へば、一は農業に依つて農業

に従事しない人を養つてやる、一つは農村から社會に働く人物を造り出すと云ふことであると思ふ。

尙ほ、今迄は何でも子供を教育するのは大きくなつてから役に立つやうにと餘り期待し過ぎた。殊に近頃の農村では無理遣りに田地を賣拂つてまで學費を注ぎ込む。子供さへ教育させて置けば、年を取つてから樂が出来ると云ふ考へらしい。甘く行けばその通りであらうが、田地は無くなる當にした息子はロクなものにならぬといふもの中々多い。教育は本性を發揮させるのであるから、高い教育を受けさせて俺達が養つて貰ふと云ふのは本當の正しい考へでないと思ふ。

それから子供は何でも大人になる準備であると云ふ風に考へて來たのも間違ひである。どこでも能くあることであるが家庭などで一寸したことにも飛んだ間違がある。例へば、御前は子供だから酒を飲んでならぬと云ふ、子供だから飲んで悪いのか、そんならば子供である内は我慢しよう、大きくなつたらウント飲んでやらうと云ふこ

ことになる。何だお父さんは半分でよいから付けて呉れなんて、タツタ一合瓶をケチなことを云つて居る、俺が大きくなつたら一つ奮發して毎晩一升づ、飲まう、それ位のものにならなければ親の名折だなど、考へることにならぬと限らぬ。外にもコンナ例は澤山ある。抑も子供には子供の時代でなければ出来ないことがある、青年には青年の舞臺がある、大人の準備とばかり子供を見てはならぬといふのが教育の定説だといて居る。

今日までの我が農業學校の制度に就いても色々の疑問がある。と云ふと、お前は現に其の位置に居るんだからやつたら宜からうと云ふ方もあらうが、私に未だ夫れ丈の力がないのは残念であるのみならず、斯ういふことは一人や二人で出来るものでなく國民の多數が其の事を考へて輿論といふものが湧かなければならぬ。思付きが大體一致しないと本當の仕事は決して出来上らない。私はさう云ふ考へを持つて色々の疑問

を抱いて居るので、此の點に付て御考へを願ひたいと思ふのである。

その一つは従來の農業學校が、餘りに農業ばかりやつて居たと思はるゝのである。それではいけない、もう少し農業以外のことをやる必要があるまいかと考へられる。それから、先年來よく論せられることであるが、今迄の農業學校では技術に偏して居つたと云ふことである。もう少し經濟を重んじなければならぬ、經營と云ふことを教へなければならぬと云つて、現在では農林省でも、文部省でも技術に偏せぬやう經營經濟と云ふ方面を頻りに獎勵して居る。これは必要のこと、思ふが、併し人間と云ふものは利益、經濟だけで濟むものかと云ふと夫れだけではいかない。現に資本主義は行詰つたと云ふので、従來の經濟學は改造せなければならぬと云ふのである。能く云ふことで、農業は大に生産を増さなければならぬ、而して大に儲けなければならぬ。それは其の通りであるが、それだけで満足出来るかと云ふと、どうも満足出来ない點がある。それだけで宜いものならば従來の資本主義と云ふものゝ渦中に投ずるに過ぎ

ないのである。今更後れ馳せに行詰つた所に這入る必要はないと云ふ理窟になる。

一體生産と云ふのは何を生産するのか、人間の力で無から有を生ずると云ふことは出来ぬ、地球上に住んで其れから資料を貰つてやつと生きてゆく。人間が造ると云ふが、實は物それ自身でなく、たゞ其の所謂價値を生産するに過ぎぬ。價値とは人間の役に立つことで之が經濟學上の生産といふ意義である。而して此の價値を増すには是非共技術によらねばならぬ。何と云つても技術を離れて出来ないものであるから、技術は農業の根柢で、決して之を輕んじてはならぬと思ふ。それから、進んで經濟は無論大切であるけれども、經濟と云つても唯儲けるばかりが能でないことを思はねばならぬ。抑も儲けるのはそれを使ふためだといふことを忘れてはならぬ。生産は消費の爲であることは勿論、金を儲けても昔の長者のやうに千兩箱を柳の根元に埋めて置いたと云ふのでは今の世に通用せぬ。

それで農村に大事なことは、先づ第一技術を研いて立派な産物を澤山取上げる、次

に其の收支が相償つて利益の澤山あるやうに經營を上手にやらねばならぬ。而して最後に忘れてならぬことは、それによつて平和なそして幸福な生活をするに云ふのである。此の三つの内始めの二つだけは誰も重んずるが、三番目は分り切つてゐるといふのか兎角餘り考へられぬ。農業教育でも今後の方針としてはどうしても生産ばかりではいかぬ。經濟ばかりでもいかぬ。之に加へて社會の生活と云ふことを教へて行かなければならぬ。近頃唱へられる學校の社會化といふことも、一は此の邊の事柄と關係があるやうに思はれる。

學校の社會化は私も必要と思ふが、之は子供等に世の中は斯ういふもの、あゝ云ふものだと説いて雛形を教へた所で本當ではない。兒童の學校生活を社會其のものとして行かなければ本當の教育は出来ないと云ふのである。目下農村で最も大事な補習教育に付いても、その本旨として一方に職業科を重んじ、何でも職業に關する智識技術

を教へなければならぬ、即ち生活の手段を教へて獨立に暮して行ける丈のことを授けねばならぬとする。而して、もう一方には公民科を大切とし、吾々は孤立して暮せぬ社會的に共同生活をやつて居るから、其の社會生活に適するやうに訓練し社會の組織制度に關する事柄を教へ、共存共榮を爲し遂げるよう情操を養はねばならぬ、生活と云ふ事を度外視して教育が出来る筈はないと斯う云ふ風に考へて居るのである。

農業教育といふ場合にも單に技術だけの教育をやつては居られない、單に經濟だけを説いても駄目だと云ふことになる。學校で五年とか三年とか教へても、それで直に立派な卒業生を出すといふことは逆も出来ぬ。直ぐ間に合ふと云ふ生徒を造るよりも所謂原理原則を教へる、學理を教へて根本の型をシツカリ呑込ましめる。直ぐには役に立たないが、段々年月を経て磨かれて行く、經驗によつて光が出て世の進むと共に愈々役に立つやうになる、斯う云ふのが學校の學校たる所以である。鎌を造るにしても其の刃を薄くして置けば、初は相當切れるが間もなく役に立たぬ。刃を厚くして置

くと新らしい間は切れないが、段々砥石で研いで使つて居る内に能く切れて長く使へる。教育も同様で間に合ふといふことは將來に期待すべきで、卒業し立ての役に立つのは薄つべらなものである、一寸便利だが時勢に伴ふ進歩などは難しい。卒業した時分には直に役に立たなくとも、三年と經ち五年と經てば間に合ふ許りでなく、益々進歩發展することが出来る、是が徒弟教育と違ふ所であると思ふ。

農村教育といふ以上は、實際の農村の社會生活に適應した人間を造らなければならぬが、此の生活は非常に複雑して居るので、實に難しいのである。始め農村は斯う云ふものだ斯んな風の農業家を造らなければならぬと思つて居るが、それは五年經ち十年經つと時勢が移つてスツカリ後れて仕舞ふことがある。社會を組織して居る人間の本性が未だ十分に分らぬから、社會そのもの、ハッキリせぬのは仕方がない。私は能く知らぬが心理學などでも、元は人間の心は知情意の三方面あるといふやうな事を説

いたが、今日では人間の心は始終動いて居るものである、其の現實有りのまゝを研究しなければならぬと動的研究といふのが起つた。殊に精神分析學など、いふ名前を付けて居るやうであるが、人心の觀察は正氣の折にはホントが分らぬ、何でも眠つて居る間に研究せねばならぬといつて、寢言や寢返など無意識の言行を注意するやうになつた。

藝術の進歩にも妙な傾向があつて、今迄は肖像畫を見てもハア是は能く似て居るなと言つて感心したのであるが、人間は其の繪にあるやうな一定の姿勢を何時でもしてゐるものぢやない、多分一生涯にタツタ一度だけそんな姿をしたと云ふに過ぎない。それで近頃進んだ繪は一寸見ると何が何だか分らぬ、顔が三角形で目が三つもあつたり手らしいものが三本も五本もある。化物のやうで誰の肖像だと聞いても似て居らぬが、能く説明を聞いて見れば成程と思はれる。即ち人は一瞬間でもチツとして居るものでない、手足が動かなくとも心が動いて居る、其の精神を現はすといふのにタツタ

一瞬間の姿を描いてもいかぬと云ふのである。左を向いて居る時もあれば、右向く場合もある。上を見ることがあれば下をにらむこともある、だから眼は二つ丈では足らぬ。手でもさうで前に伸すこともある、後に廻して下げてゐることもあるから、三本も四本も書かなければならぬと云ふのである。成程進んだものだ、新しい繪とはそんな味があるのかと感心するが、教育と云ふものも全く同じ趣旨を汲まねばならぬ節がある。一定不動の型を拵へて教育しようとしてはならぬ。動いて居るものを教へて人間をつくるといふことを忘れてはならぬと思ふ。

農業を教へるにも、栽培學で畦幅や種子を蒔く分量は土地によつて違ふ。何尺何升といふ規定も大事だが、その準據すべき道理を教へねばならぬ。農業が常に動いて居る證據は澤山ある。今年は水加減もよかつた病虫害もなかつた大層宜いと思つて居ると、花時に大嵐が來て美事であつた稻がすつかり駄目になると云ふことがある。倒れ

てモウ駄目だから引抜いて了へといふのは、學校の實習農場などで能くやることであるが、實際の農家に取つては夫では濟まされませぬ。

學校の實習は斯ういふ點で色々考へねばならぬものがある。又極く普通に行はれて居ることであるが、午前中に學科をやつて午後實習をやる、晴耕雨讀といふのは昔からの理想であるが、一日の内を頭と筋肉の使ひ分けは餘程考へねばならぬ。また野仕事は午後だといふのは實狀に遠い嫌もある。近年學校ではかり實習せずに、家庭で實習すると云ふことが大分行はれて來たのは喜ばしいと思ふ。

又學校と云へば日本の制度では何れも學年をなし四月始めて翌年三月に至るといふのであるが、春秋の農事の忙しい時には野で働く、冬の閑の時に教場に出て習ふと云ふことに出來ないものだらうか。年齢から見ても小學校を終る頃が一番に實地の手始めに大事な時であるが、それが直ぐ學校に這入ると云ふことになつて居るのは如何なものであらうか。小學校を終つたら實際の農業に二三年從事して實習する、それから更

に進んで學校に這入ると云ふことにすれば面白いではあるまいかと思ふ。

× × ×

色々なことを秩序もなく述べたが、要するに私は今日の農村教育は斯うあるべきだと云ふことを述べたのではない。今日迄の所で澤山の問題のある内、將來改めなければならぬと思ふ二三の趣旨を述べたのである。是等の點に就て實際の見聞と經驗から意見を纏めて戴きたい。天下の輿論が出來たらそこで大に改善され、わが日本の制度も内容も將來進んで行くだらうと思ふ。

(大正一四、一一 山形にて)

天敍有典、勅我五典五惇哉。天秩有禮、自我五禮有庸哉。

尙書

## 二 家庭尊重

學校が社會の中心となるべきことは元より望むところで、こゝに一村の經濟も社交も娛樂も起るのが理想である。されども、かくいふは決して家庭を無視せよとの意ではなく、兒童の環境を重んじ生活に即した教育をなすためには、その家庭を最も尊重すべき必要あるは多言を要すまい。たゞ教師の熱心な餘りか親切に過ぎるためか、動もすれば生徒の家庭を輕んずることが事實に認められる。現に父兄の爲すところが低いから夫れを引上げようとするのは甚だよいが、その態度や言葉が少しでも誤れば妙な結果となる。即ち、兒童や生徒が學校で聞くところを優れりとするのはよからう、それが拙に父兄を輕蔑するに至つたら考へねばならぬので、やがて家庭の内に畏敬の念を失ふことゝなれば、遂に離れ去るやうにもなるのであらう。

例へば、自宅で味ふどころか曾て聞いたこともない料理を學校で習ふ、歸つて夫れ

を母姉に告げて共に試みて一家の食膳を賑はすは結構だが、若し程度を超えたものであるなら結果は畏るべきものとなる。過般も或友人の語る實話を聞くと、

「娘が學校の課題だとして住宅の設計をしてをると、可なり大きい家で餘程の資産家でないと住めぬものであつた。身分が違ひはせぬかと注意すると先生の示した坪數だといふから黙過したが、自分よりも少い収入の家庭が確に多い筈であるが、教師は一體何を標準としてをるのだらうか。」

と云ふのであつた。實際かくして虚榮心は養はれ、身分不相應な考が育てられるのであるまいか。家計を説くときには多く収入幾千圓と直ぐに貨幣高を擧げ裏庭に手作した蔬菜の利用は忘れがちである、俸給取を希望して農家に嫁ぐを嫌ふやうになるのも尤もか。たゞ夫れだけに止まらば尙忍ぶべきであらうが、父兄を敬愛する心を失ひ長上を蔑にするやうになれば、思想の混亂といふことは當然この邊から來るのではあるまいか。

兒童の教養を考へて家庭の重大なことは、今更こゝに權威者の所説を聞くまでもあるまいが、かのルソーは「母は自然の教育者である……家庭ほど兒童にとつて美はしい所はない」と云つた。コメニウスも大に家庭の影響を重視し、母による教育の肝要なことを切言した。近くキング氏が『教育の社會觀』に論じた一節にも「家庭や近隣でなされる日常の社交は、人類幼稚な時代に於ては即ち唯一の教育であつたが、如何に進んだ文明でも矢張り最も重要な教育の一手段である」と説いてをる。

學校は眞似ではならぬ、模型でも足りぬのである、それ自身が一の社會であり生活であらねばならぬといふ。家庭の實務が如何に大切であり有効な教材であるかは問ふを要すまい。斷片な學校の課業にのみ没頭し、その課程だけを全うして他に劣らざらんとするが如き、敢て實際の効果をいふまでもなく教育としての價値なきは知るべきである。知識や技能ではなく實に徳性を思ひて、殊に最も怖るべきは己を忘れることである。自己の地位や境遇に甘んずることを知らないで、他を羨み妬み不平を懷くに至

ることは深く戒めねばならぬところであらう。

入學難といふ聲は餘りに高く、少しく好評ある學校の入學試験に合格したといふことは、兒童や生徒の誇だけで止まらないで父兄の虚榮心を充すに足りる。學校のためと云へば母姉は一言も拒み得ぬので、稀に家の用事を命せられて「今は復習してをる豫習で忙しい」といへば夫れで済む。机に倚つてさへをれば要らぬ雜書に讀み耽つてゐても、父兄は學習に勤勉なものとのみ察してをる。子女のために親が心身をつくして氣をつけるはよいが、謂はゆる甘やかし世話が過ぎては決して良く育たぬ。寛嚴よろしきを得て長上を畏敬する心を失はぬやうせねばならぬが、若し學校が少しでも此の指導に妨をなすやうでは誠に申譯はあるまい。

補習教育は家にあつて日常の業務に従ふものを相手とする、實業の繁閑に應じて萬事を處し學校での教育を寧ろ従として家庭での學習を主とする。教へ授くるといふよ



りも學び習はんとする志を起さしめ、間に應じて答へる工風が大切である。生徒の要求に應じて身分や位置に適したものを與へねばならぬ。されば、同じ學校内でも一律でなく、都合のつく限り生徒の便宜を圖らねばならぬ。現に多くの實例が示す通りに實業補習學校の眞に活動してゐるのは、元より前期ではなく後期でもなく、それを終つてからの研究科にある。研究科が振つて農村の隆興ともなり、現下の大問題として斯教育の使命も全うせられるのであらう。(昭和二、一)

よき人のよしとよく見て好しといひし

芳野よく見よ良き人よく見つ

御民われ生ける驗あり天地の

榮ゆる時に逢へらく思へば

### 三 高等小學の農業に就て

謂はゆる農村問題が喧しくなり、その解決には多方面に亘つて各種の手段を必要とするが、教育は根柢をなすものだと誰しも異論のない所である、農村の教育がこれまでは都會の夫れを真似たやうなもので、教育して却つて農村に向かぬやうになる、何とかせねばならぬといふのが一の輿論となつた。それに他の理由も加つて、遂に師範教育制度の改正となり、高等小學校制度の改正となつた。

改正されて近く實施されようとする高等小學校は、特に實業科に重きを置き其の授業時數を増したのである。由來わが高等小學は概して其處だけで學校生活を終るものを收容し、實世間に出で、働くに適するやうに教育せんとする。都市に於ても元より其の必要程度に差異はないが、現在は各種中等程度の學校が都市に多く存するので、實際に於て高等小學校の活動範圍は農村に甚だ多大と見られる、随つて商業や工業に

も種々の問題がないではないが、高等小學の實業科目として農業は更に多大な關係があり、色々の方面に深く考へねばならぬものと思はるゝのである。

言ふまでもく、小學校は尋常科は元より高等科にあつても、或は國民學校など、呼ばるゝ實例もある通り、その義務教育であるといふことから見ても、謂はゆる國民教育の基礎をなす所である。地方の實狀に應ずべきで、劃一は宜しくないと論せられながら、遍く一般國民の教育の基礎であるといふ點から、甚だしい差別異同があつてはならぬものである。勿論、その環境の異なるに隨つて都鄙の別はあり、父兄家庭の境遇や地位によつて相當の異同はあるべきだが、都市に生れたもの必ず商人たるべしといふことなく、農家の子弟は成長して後に何れも農夫たりとは決して限らぬ。このことを考へると、小學校教育の根本には飽くまで普遍性を認めねばならぬ。

職業や住所に束縛を受けて居た昔の時代でないから、今は成長して何業に従來しよ

うとも何地に住居しようとも自由で、その決定は誰がするかと云へば畢竟自らなすのである。父兄や先輩に相談して意見を聞き、家庭その他の事情を斟酌すべきは元よりであるが、其の時に至つて考へた結果何をなし何處に住むべきかを自ら決定するのである。都市に生れたから都市にのみ暮すと限らず、田舎に生れたもの生涯その田舎に住まねばならぬ理由はない、商家に生れたのであるから必ず商人となるべく、その準備として高等小學校で商業を習ふのだと、餘り窮屈に考へては國民教育の基礎たる、元來の本旨に差障があると云はねばならぬ。大體に於て都會の商工業者の子女が長じて商工の人となり、殊に農家の子女が農家に生涯を終るといふこともある。そのために都會では商工業科を農村では農業科を、高等小學の實業科として課するといふのも忘れてはならぬ。然れども、小學時代の兒童に對して「汝は長じて後は必ず商たるべし又は農たるべし」とは、父兄も之を命令することは出來ぬ、教師にも元より之を定めることは出來ぬのである。之を命じ得るものは兒童それ自身の外にはないが、未だ

成長せぬ小學時代に之を定められぬので、學校生活を終へて後に稍々長じてから始めて決し得るのである。

農村に生れた子女は、多分が家庭その他の事情で中等以上の學校に入ることには出來ず、高等小學を以て已むなく満足して實世間に出る。その多數は父兄の業を繼いで生涯農村に暮し、農業を以て終始するものであるに相違なからう。然れども、其の内の少數は必ず農以外の職業に従事するものもあるので、その農村を離去して都市に行くもあらうが、郷村に留まりながら生れた家の父兄とは違ふ業務に服することもある。また農村と押しなべて云ふが、少くとも現代の我が農村では、農業家のみが住居してゐるといふ村は殆どない。その數や割合は少いにしろ、農村と呼べるゝ所でありながら農以外のことを稼業とせるものが相當に住んで居る。此の農以外のことを職とするものゝ子女も、農村の高等小學校に於て教育を受くるものが少くないのである。

つまり農村の高等小學にあつても、將來必ずしも農業に従事せぬ兒童が幾分かある。少いから問題とするに足らぬといふのは、決して機會均等を唱へらるゝ現代に承認されぬこと、多數で少數を抑へて犠牲に供するといふのは許されぬ。それで少數ながら將來は農業をやらぬといふものに、高等小學で農業科を學習せしむる、その理由は特に存在せねばならぬのであらう。従來は實業科を隨意選擇として居たが今般の改正で必修科目となつたのである。たゞ農家に生れたのであるから、成長して後は多分農業をやるであらう、そのために今から準備として農業科を學習するといふ丈の理由ではあるまい。抑も根本から云へば、職業科として専門科として農なり商なりを學習することは、國民教育の基礎たる小學校でやるべきでない、小學の義務教育を修了してから後に、夫々の時處で各その目的に叶ふやうな學習をすべき筈である。

教育は人物をつくるのである、性格を陶冶するのである、とは何人も疑はぬことゝなつて居る。一つの或型を豫想して其のやうにつくり上げるといふやうなことを考へ

られた時であつたが、それはヨシ希望であつても到底出来ぬ事實であることが分つた。経験のない見聞もない兒童を捉へて、農家に生れたからとて強制して農夫たるべき型にはめることは出来ぬ、況んや農家以外に生れたもの又は將來は農業に従はぬといふものを其の型にはめられぬ。

こゝに深く考へて見たいのは、人類は地球上に生れ出で此の自然から生存の資料を得て居る、その生存の資料を得る手段として、農は最も確實な健全なものであるといふことである。狩獵や漁撈は破壊的であり、それだけに安定して居らぬが農を始むるに至つて建設的となり安定した。人類生活の沿革や經濟發展の歴史を茲に詳述する餘裕はないが、農によつて人類は定住するやうになり、遂に文明は始まつたといふことは史家の等しく一致して承認する所である。此の意味で、農は萬人が一通り心得て居て何の支障なきのみでなく、實に生存の根柢として當に相當の智識を有すべきである

から、田舎に於てのみでなく都市の小學校でも學習せしめてよいと思ふ。

また、教育して兒童の個性を發達せしめようとするに、各その經驗により境遇に應じて行くべきは元よりで、それを重んじないではトテモ教育の効果を全うすることは出来ぬ。農村に生れたものは其の父兄家庭の職業が農以外でも、日常その目に觸れ耳にする所は農事を中心としたことである。農村といふ環境に育つものであれば、將來成長して後に何にならうとも夫は問はないで、その環境である農事を教材とするのは教育の最も適當な方法であると云はねばなるまい。決して農夫たらしめようとするのみでなく、商となり工となり將た政治家たり藝術家たるのでもよい、農村の小學校で農を教へるには少しの差支なく、實に最も便利であり甚だ必要といふ一の理由が茲に存するのである。

人は自然の恩恵によつて生存するので、自然そのものを出来るだけ理解せしめねばならぬ、そのために理化といひ博物といふ科目を課する。小學校で理科と呼んで單一

の科目とするのは、簡易を期してのことではあるが別に味ふべき意義がないでもないと思ふ。即ち自然を理解せんとして便宜から分析し、植物や動物や礦物を取離して取扱ひ、物理や化學を單純科學で説明するが、それらを綜合して初めて自然そのものは分るので、此の綜合を兒童の頭腦感覺に放任するは難しいと云はねばならぬ。草あり水あり虫動くといふ、渾一融和の自然そのまゝを理解するのが目的で、之を爲すには決して斷片の植物や礦物をのみ知つても出來ぬから、「自然研究」といふことが唱へられて教育上に重きをなして居る。我が邦にも嘗て學校園の必要を説き、都市の多くの學校にも設置されたのであるが、その意義は甚だ重大でありながら尙未だ徹底せぬためであつたか、爾來甚だ振はないのは遺憾に堪へぬのである。教室で標本のみで説くのは極めて不十分で、戶外に生きて動いてゐる自然を観察せしめ、花と鳥と石と且夫等の連絡關係を其のまゝ理解せしめねばならぬのである。

分解は理解を助くるに甚だ便宜で必要だが、それを更に綜合して元のものとならし

むるは、その確實を證する所以で亦缺いてはならぬことである。例へば、水を理解するために分析して酸素一と水素二から成ることを知る、それだけでは尙未だ十分なりとせないで、更に別に酸素一と水素二を取つて實驗し、之を合せたものが果して水とならば初めて満足すべきである。自然を理解する方法も亦同じで、博物や理化に分解するのはよい、自然そのまゝを観察するのも必要だが、種子を土壤に下して温度と濕氣を與へ、生育せしめて花を開き實を結ぶ實驗を試むれば更に全しと云ふべきであらう。農は生物の増殖を圖ることである、自然の最も靈妙な現象を綜合し實驗する所以と云ふべきことである。人を教養し性格の陶冶を圖るに最も良い教材として見るべきで、かの想像を實現して甚だ有効だと云はるる手工にも優るものがある。

手工も現に師範學校では相當に力を注いで居りながら、小學校に於ては頗る振はぬ状態にある事は残念であるが、強いて手工の弱點を挙げようならば其の範圍が局限されてゐるといふ事にある。人の手わざで出來るだけの事に止まるから、手工で得意に

なると世事は人の力で出来ぬことは宇宙にないやうに思ひ、科學萬能といふやうな弊に陥る。神秘や靈妙を斥けて傲慢となり、不謙遜となることは人として決して全きものではない。農事は自然に頼つて生きたものを取扱ふので、忽ちにして風雨のため昨日まで青々たりしものが一夜に枯れることもある。俄然として病氣に冒されて發育盛りに斃れることもある。それで人力の及ばぬものゝあるを悟り、謙遜の徳を失はずして敬虔を學び得るので、之は亦深く味はねばならぬことであると思ふ。

更に人は決して孤立して存するのではなく、生れ出でた時に既に父母あり親戚あり、生涯共存の生活をなすものたることを思ひ、此の社會に生活するのは必ず一の定つた業務に従ふべきであるを考へる。たゞ本能や衝動にのみ任して言行を縦にするのではなく、生きて行かねばならぬといふ運命に、此の世で正當な職業を有せねばならぬのである。學校を社會化せねばならぬと説き、教育は實生活に即せしむべきだと論ずるは

此の故で、三つのRでなく三つのHだといふ、その頭腦と心胸と手を十分に發育せしむるに、此の實世間を離れて爲し得ぬことは明かになつた。實業科を授くるは、唯その智識技能を附與して將來の生活に役立たしむるといふ以外に、實生活に離れることの出來ぬ其の職業を教材とし、其の實業を通じて性格を陶冶し人物を築き上げようとするのである。農は生物の増殖を圖ることだが、その生物も普通なものではなく人の用に役立つやう畸形となつた、作物や家畜を取扱つて其の増殖を圖るので、而も、收支相償ふのみでなく以て利益を擧げるといふのである。自然の作用に社會經濟を含めて居るから、教材として特別な價值がある。

農村の小學校で悉くの兒童に農業科を課するのは、以上に述べたやうな理由があると思ふ、決して單純に考へてはならぬものがある。今回その高等小學校制度を改正して實業科を重んじ、その時間數を増加したことは、種々に批評の餘地はあらう、たゞ

其の意義の甚だ深きものあることは十分に認めねばならぬ。最も新しい實生活に即した教育として、自然に恵まれ行く人類生活の根柢として、農の事と業とを兒童に授くるのである。而して眞に人として教養ある成長を遂げたならば、その結果として必ずや謂はゆる農村問題などの解決の原動となるであらう。されば、農村の高等小學校で農業を課するとき、技術や智識は基ではあるが夫れに捉はれてはならぬ。農事に巧な農業に精しい人夫をつくり得て満足しはならぬ、以て生々動いてをる自然を理解せしめ、人類生活の本義を納得せしむるやうに努めて各自の個性を發揮せしめ、やがて獨特の人生感を築かしむるやう、飽くまでも國民教育の基礎たるを念とし、人として國民として市民として教養せしむべきである。

#### 四 小學校に於ける農業教授

高等小學校の改正が行はれたに付ては、色々の意味が含まつて居るが、其中實業科目の時間が増加され、且必修科になつたことは御承知の通りで、其の實業科目中の農業に付て御話をするのである。

抑も、先般の改正を見るに至つた機運といふか原因といふのかは色々あらうが、從來の教育が兎角概念的に偏してゐたといふのが主な一つである。私は教育學の素養が不十分であるから、ハッキリ言葉の使ひ方を知らないが、概念的などと専門家は甘いことをいふものだと感心した。詰り机の上の講義とでも申すか、農業を教へるにしても從來は肥料とは何ぞやといふやうな、大學の先生が議論しても決定しない事を定義として小學校で教へて居つたのである。それで説明させて見ると、可なり偉い事を言ふし何だか知つて居るやうに思はれるが、實際はロクなことが出来ぬ。本當に生活に

即し實際に基いて居らなんだ。それではいかぬといふので、實業科目を重んぜねばならぬといふに至つたのである。

修身教授に於ては、親の命には能く従はなくてはならぬと口を酔くして繰返し説くが、どうも實際は教育を受ければ受けるほど親の命令を聴かなくなつて居る。是は世間にも責任があるが、教師其の人にも可なり大きな責任があるやうに思ふ。私は自分の子供に就ても能く考へるのであるが、殊に中等學校に行くやうになると宿題などのためかも知らぬ、子供は學校の事に追はれて親の言ふ事などは聴いて居れぬといふ次第、母親がチョット赤坊の蒲團を敷いて呉れといふと、女學校に行つて居る姉は明日の準備が忙しいといふ、母親は夫れでもと云へないで黙つてしまふ、却つて親が子供の命これ従はねばならぬことになつてをるのである。子供は朝も忙しいから就寝する時に明朝は早く起して呉れと頼んで寝るが、睡いために一度位起しても起きない、大分たつてから漸く起きて来て、あれ程頼んで置いたのに起して呉れなんだなどと言つ

て怒る。大急ぎで荷物を整へて玄關に出てから、お母さん〜と呼ぶ、何だといふと帳面を忘れたから取つて来て呉れといふ、母親に命令して使つて居るのだ。是は一例に過ぎぬが、斯ういふ風に教育されてゐては少々心配になる。實際の生活に即した教育でなければならぬといふならば、眞に社會生活上に爲すべきことが出来るやうに、唯説明のみではいけないのである。事實を知つて居るといふのみでなく、平生の行爲が出来て慣習づけられねばならぬと思ふ。それに何も實業科目をやるに及ぶまいといふ論は出よう。私も小學校で必ずしも農業とか商業とか言はないでもよからうと思ひ、寧ろ作業といふ言葉を用ひたら宜いだらうとも考へてゐる。親の言ふ事を聴くといふのは、唯さうすべきだと解つてゐるだけでなく、本統に聴いて行ふのでなければならぬ。學校に行くのは何の爲かといふと、良い人間になる爲である。それには親の言ふ事を聴くのが大切な條件で、學校の宿題は捨て、置いても親の言ふ事は聴かなければならぬと思ふ。親の言ひつけに従つて庭を掃き雑巾を掛け、臺所の手傳もすると



いふのでなければならぬ。だから作業と言つてやらしたら宜からう、何も農とか工とか云はないでもよいと思ふ、たゞ作業ではぼんやりして居るといふのみでなく、特に實業といふことになつたのは亦それに多少の意味があるのである。近來勤勞教育といふことが、盛んに唱へられて居るが、その邊の深い意味があるので、即ち勤勞に依つて人間をつくるといふのである。實際に於て唯作業とか勤勞とか言つても見當は付き難いが、其處に實業といふものを持つて來れば、一つの明瞭な點が浮んで來る。

其處に至ると少し大きな事を言ふやうであるが、私は根本に立入つて深く考へなければならぬ。即ち人間といふものを考へなければならぬと思ふ。人間が此の世の中に生れて來て——生れたといふこと夫れだけに就ても色々説明を要するが、兎に角生れた以上は生きて行かなければならぬ。是は何をおいても第一の要求である。尤も中には生きる事に満足しいで死を喜ぶものもあるが、あれは變則であり例外であると思ふ。

世間には死を美化するといふやうなことをいひ、自ら死を求めて得意になつてをるものもある。何事にも例外はあるから特種な場合に左う道理の一つ二つは認めても宜からう、根本としては生きて行かなければならぬのである。また人は、地球を一步も出ることには出來ぬもので、飛行機で空中を征服するなど、は未だ早い、大きなことは深く遠慮すべきである。而して生きる爲には食はなければならぬ、渴すれば飲まなければならぬ、寒ければ着なければならぬ。其の生きてゆくための資料を何處から享けて居るか、是は悉く土から大自然から貰つて居るのであつて、地人の關係は我等の根本問題である。

更に人類は孤立して此の世に生きて居るものでないことを考へたい。動もすると自由とか平等といふことを唱へて、人間は獨りで生れて自分で大きくなるものと思ふて居る。甚だしきは頼みもしないのに勝手に産んで置いて孝行を強いるなど、言ふものがある。一面より觀ればそれも尤もな説で、論理上正しいやうに見えるが、根本の生

活といふ點から考へると飛んでも無い間違である。斯る論議が若い人の頭にあつて、一寸反駁の難しいやうな色々の理屈を捏ねるが、能く事實を見て生活の真相を考へたのである。即ち人は地球を離れて生存の出来ないもの、且社會共存の一員としてのみ存在するのである事を悟らねばならぬ。抽象的に考へて、抑も最初の時代には社會はない、唯人間があり家族があつて、それが段々社會を築き上げたといふことは出来るか知れぬが、現實の我等自身の發生並に存在を思ふと、生れた時に社會は既に存在して厭應なく其の一員となるのだ。お互に生れてから世間を見まはし、こゝに日本といふ社會あり、向ふには英國といふ社會がある。その内で何れが宜いといふ自由意志を働かし選擇して日本の社會に仲間入りをしたのではない。さういふ自由は與へられて居なかつたので、何か知らぬが生れた所が日本といふ國土の社會であつたのである。殊に日本の内でも、或は東京府であつたり神奈川縣であつたり、隣りには大邸宅を構へた金持があるのに、自分の家は貧しい破家であると言つた具合で、恨んでも如何と

も致し難き實際である。不仕合で損だからもう一度生れ更つて來ればよからうが、どうもさういふ自由も與へられて居らぬ。之は議論ではなく事實だから恨んだとても甲斐はない。あきらめるといへば消極の嫌があるから、私は運命を思ひ使命を悟つて覺悟を定める外はないと思ふ。

斯やうな立場にあつて、人は手を動かし足を動かして居るので、それを學者は努力とか勤勞と言ふが、生きる爲には是非ともせねばならぬのである。此の人類の努力は色々の方面にあるが、先づ職業とか産業とか實業と云つて最も切實で、小學校に於て勤勞を教へるのに實業科目を課するが最も宜いことになるのである。而して實業の科目は色々あるので決して農工商の三つには限らぬが、たゞ便宜上この三者の内を探ることにしたのみである、水産なども元より希望するところである。何れにせよ修身や國語や體操など謂はゆる普通教科目以外に、實業科目と呼んではをるが、殊更に別なもの考へないで、農や工にのみ捉へられないやうに、勤勞作業といふことを味ひた

いと思ふ。

小學校は申す迄もなく國民教育の基礎である、今日の通稱で言へば飽くまで普通教育である。専門な職業に色づけるやうな謂はゆる實業教育を施すといふのではない。小學校に於て農業を課するのは、將來農家たる準備として農業に關する知識技能を授けるといふことに餘り傾き過ぎてはならぬ。小學校は専門教育を施す所でないから、實業とは言ふものゝ専門の職業科目とのみ見るべきでない。固より其の意味が絶無とは言はないが、それよりも、妙な言ひ方ではあるが普通學科の一と觀るべき方が強い。國語や地理を授ける目的は要するに人を作るための手段であるが、實業を授けるのも全く其の趣旨は異ならぬ。

我が農村小學校に於て農業を課する場合に於て教師たるべき人が、今教へて居る兒童は將來皆農業家になるのだとのみ考へて、農業の科目を取扱つてゆくのは少しく過

ぎて居ると思ふ。小學校を卒業して成長した後何になるかは分らない。それは教師の定むべきことでないのは勿論、お前は一生農業に従事しなければならぬなどは親でも命令されぬ。如何に神聖なる先生たりともそんな權能は誰からも與へられて居らない。成長してから後に農業家であらうと工業家であらうと、其の何れになるかは兒童自身が選定すべき事であつて、十三や十四の子供をつかまへて教師などが定め込むべきでは決してない。

農村は農業が中心となつてをる所であるから、其の環境に順應したものでなければならぬので、是非とも農業を其の學校の課程に置いて重視しなければならぬ理由があらう。生活に即するとか環境に應ずるとかいふことを説く以上、農村に於ける教育で農業を輕視されぬのは論を要すまい。教育は正純なものでなければならぬといふのはよいが、無色透明なごゝ云つて空虚な人などを妄想してはならぬ。農村の高等小學に入るものは多く成長して後に農業で生活するが、假し農家にならないでも、農家に生

れ現に農村に育つて居るのであるから、農業が中心である環境を忘れてはならぬので、矢張り其の兒童には農業を授けて重んぜしめねばならぬ理由がある。

そこで考へたいのは、農業と一口に云ひ馴れてはをるが、真に如何なるものをいふのか、教育上に果して如何なる価値があるのかといふ問題である。それは稻をつくり豚を育てることで分つてゐるやうだが、少しむづかしく議論すると實は博士を頼んでも容易に結末は付かぬのである、茲では元よりソナ難しい議論をするのではないが、幸に日本は太古から「言葉のさき香ふ國」といはれてをる位で困らないものゝ、英語でアグリカルチュアといふ言葉などは随分厄介で、その意義は明瞭でないのである。或る書物にはアグリカルチュアとは一つのアート（技術）であり、一つのサイエンス（科學）であり、且一つのビジネス（業務）であると説いてをる。少くも此の三つを皆同一のアグリカルチュアといふ言葉で表さうとするのだから困るのである。農とは技

術なのか業務なのか將た科學なのか、その何れを教へたらよいのか一概に輕斷は出來ぬ。わが邦では農と農業と農學を使ひ分けする言葉の便宜はあるが、實際には餘程考へて置かぬと迷ふのである。

それで先づ農とは何ぞやと言へば、稻を作り豚を飼ふことに相違はないので、廣く植物を育て動物を飼ふことで、生物を養ふことだと云はれる。然し單に山の木を移植してをるのでは必ずしも農と呼び難く、昔から能くいふ通りに一粒萬倍で一粒の種子から幾十何百といふ實を採らねばならぬ。たゞ一匹の豚を飼つてをるだけでなく、幼小なものを肥大ならしむるか又は仔を産ませて育てるといふ所に農たる所以がある。而して何故に斯ういふことをするかといへば、慰みにやつても宜いものではあるが、元來の目的は人類生活上に利用するためである。故に植物を育てると言つても、たゞ野にある草や木を手あたり次第に取つて來て育てるのでなく、人類に取つて役立つ植物を育てるのである。動物にしても全く同じことで、何のためにもならぬ鳥や蟲を飼つ

ても農とは認められない。

此の自然界に於ける植物の種類は非常に多くあつて、幾千幾十萬と言はれて居る。併し其の數多い動植物中、吾々が農業上に利用して居るのは、極めて限られたものゝみで、作物は僅に二三百種、家畜が四五十位しかない。一萬年の發展を遂げて苦辛を重ねた人類が、今日に至つて漸く此の位より利用が出来ない。昆蟲だけでも二三十萬種あるさうであるが、其の多數の中で人類が養ふものは蠶と蜜蜂の二種に限ると云つてもよい。斯ういふことを思ふと、作物や家畜の成立は實に容易ならぬこと、單に生物を利用するなど、言つて濟まされぬと考へる。

作物や家畜は生物學上から云へば不具者で、例へば大根は根が片輪となつてをる。植物それ自體から見れば莖葉を支へて地中から養分を取る役目をすればよいので、そのためには小指ぐらゐもあれば十分なのに、人類の利用にまかせて櫻島大根のやうな一本で何貫目といふ大きなものになつてゐる、人のために犠牲となつて迷惑至極な病的に甘んじてをる。乳牛でも仔を育てるだけなら一升か二升だせば十分であるのに、一日に一斗以上出さぬやうでは良い乳牛とは言はれない。牛からすれば要らぬエネルギーを費す譯であるが、斯る片輪なものが人の役に立つて便利なので、農學とは生物畸形學と遺傳學の應用だといふべきである。

片輪であるから普通の取扱ではいかぬので、特別に愛しいたはつてやらねばならぬ。よく不具な子をもつ氣の毒な人の話を聞くが、親心として片輪の子が殊にいたはしいと云ふのは尤で、その心が作物や家畜に對して有るべきだと思ふ。片輪を育てるのであるから、農事の根幹秘訣ともいふべきは愛憐の心である。而して此の心を以て作物や家畜を育てるのにも、更に人により場合によつて目的は違つて來るので、同じ大根でも農業者が作るのは賣出して儲けようとし、金持の隠居が作るのは物好で運動になればよく、高くついても新鮮と手作といふのを誇とする。猫の額ほどの地面に二十本ばかりやつと作り、勘定してみると一本何十錢にもついてをるが、是は自分が作った

のだと得意になつて居る。買へば十錢ほどの花を咲かせるのに、下女下男は随分小言を聞かねばならぬのである。同じ農事に相違はないが、百姓は業として骨折るので、隠居は産業に従事してゐるのではない。即ち農事に經濟の意味を加へて農業となる。この二つは區別して考へねばならぬ場合が少くない。

小學校に於ける農業は其の何れを探るべきか。農業は元より生産業である、生産業は經濟であるから收支計算して利益がなければならぬので、その意を忘れては實業と呼ぶことは出来なくなるであらう。けれども經濟としての農業を高等小學で十分に授け得るかと言ふと、私は不可能でないとしても甚だ難しいと思ふ。寧ろ農事といふことに重きを置いて力を注ぐべきであらうと思ふ。二三度參觀した經驗もあるが、實習には經濟思想を養はなければならぬと云つて、幾畦といふやうな小地積に作つた蔬菜につき、種苗と肥料と子供を使つた人夫賃が此の位掛つた、其の生産物は子供をして

町に賣りに出して差引いくらになつたと勘定して得意がつてゐるのがある。その手數と思付には敬意を表するが私は餘り其の成果を認めない、濟まぬが詰らぬ骨折かとも思つてゐる。農業の計算は左程に簡單に出来るものでないので、決して悪いとはいはぬが、それに依て經濟的教育が出来る等と考へるのは聊か見當が違ふかと思ふ。

下手にやると自然を解し土に親しましめ農村の生活を味ふ爲と思ひながら、却つて飛んでもない結果に終るかと思はれる。殊に女學校などで注意すべきだと思ふが、實習地を設けて相當にやつてゐるのは喜ばしい、よく「此處は農家の子弟であるから實習を苦とせぬ、汚い物を意とせないで馬糞などを拾つて來る、さういふ事を喜んでやつて居ります」と説明されるのを聞く。甚だ結構とは思ふがどうも信用が出来ぬのみでなく、聊か心配になる點がないでもないのである。私は斯ういふ話を聞く毎に在校生ばかりでなく、何年間か卒業生の状態を見ねば安心が出来ぬ。よく春期の運動會に三月卒業したばかりのものがドンナ服装をして母校に來てゐるかを注意するが、學校

で袖の長さや綿服など、餘りやかましいと、如何に質素で有望らしく見えても、卒業すると間もなく華奢に急變するのである。在學中には先生がやれと云ひ級生皆が一所にやるので、馬糞も拾ひ野菜車も推すが、ウツカリすると乳飲兒を抱へて同窓相會つた時に、學校では馬糞を拾つて愉快であつたとは言はない。あの時よくもあんな事をやつたものですねと、一つ話に出る位のものである。園藝を習つたことが生なか厭やなきたならしい仕事の體驗に終るのである。それ位ならば昔の歌人のやうに草茸の家根に月の懸つた景色を思はせ、呑氣な静かなものと思はせて置く方がよい。自ら經驗せしめて苦しい厄介な而して利の少いものたることを知らすには及ばぬので、微妙な點で分れる極めて細心に注意すべきこと、難しいことながら是は餘程大切な所と思ふ。殊に經濟に重きを置いてやるといふ事になると難しく、立派な農家が懸命にやつても引合はないと云はれるのを、子供にやらして利益を擧げようとするのは容易であるまいと思ふ。

更に經濟に重きを置き過ぎて困ることは、今日の資本主義經濟の世の中に於ては、農業は如何に勘定しても金錢上に利廻は少いのである。私も農業經濟學徒の末席に居るので色々な報告や話は聞いて居るが、都會の製造工業や商業などに較べて残念ながら劣るのである。是は農業といふものが今日の經濟界に於ては已むを得ぬ理由もあるので、少數の農企業は立派に儲かるのも勿論あるが、我が農家の多くは決して儲けるのを目的とする企業をやつて居らぬのである。それで利益本位に導くと、骨を折つても僅に六分にしか當らぬ。それよりも商工業などは一割以上にも當るからと考へて、農業を廢めて都會に赴くといふことになる。教育すればする程さう考へるのは當然で、農業だけで儲かることをするに止まらないで、モット利益のある商工業に移らうと、目先が利くやうになるのである。

或學校で私は經濟を教へてゐたが、武士氣質の校長が「どうも今の若い者は勘定高くて困る——校友會の豫算に付て盛んに議論したので——豫算の奪合ひなどは見苦し

いと」食堂か何か雑談の折に云つたことがある。私も同感ではあるが校友會の討議は一の練習場とも心得て世話してゐたので、横口を入れて「私は之を進歩と思ふ。若し生徒が経費を口にせない位ならば、私の教へた甲斐はないのだ」といふやうなことを云つたのである。農業を教へて經濟を考へさせるならば必ず利に敏くなる筈、さうでなければ教授の効果はないものと見るべきであらう。ただ然し利が最後のものではない、利よりも貴い夫れ以上のものがあることを合せ考へさせねばならぬのである。

私は斯ういふ機會に能く例に擧げるが、我が邦で農業政策を實施するに當つて、從來は何を奨励するにも餘り利を以て喰はした嫌があつたと思ふ、例へば、鶏にしても從來の地鶏は不利益である、新しい多産系のレグホンを飼へ、一年に卵を三百個も産む、一個三錢としても儲かると言つて勧める。正直な百姓はそんなに儲かるならさういふので、今まで飼つて居つた鶏を安く賣り拂ひ白いレグホンを高い値で買ひ入れる。

今迄の地鶏は丈夫だから放つて置いてもよかつたが、改良種は未だ取扱が馴れぬから病氣に罹つたり斃れるものもある。また三百個産むといふが管理に不十分な點もあつて左ほごには産まぬ、差引勘定して見ると餘り利益にはならないことになる。百姓はさういふ事を勧めた技師を恨んで、折角の養鶏事業も一頓挫を來すといふ風である。明治の農業は斯の如き歴史を多く繰返したので、百姓は「あの技師の言ふ事は嘘である、若しそれが實際なら安月給を貰つて技師などやつて居る筈がない、自からやつて成功するだらう」などと云ふのである。一度信用しない癖が付くと、容易に再び新しい事を聞かぬのが農民の特性で、保守主義だと云はれる百姓でも本當に利益のあることならさう勧めないでも直に實行するのである。この邊の心掛は指導奨励する側の人が常に持たねばならぬことであらう。また中には成績が甚だ良く、成ほど技師の言ふ通りだ三百までは産まないが二百三十は缺けぬと喜んで盛んに飼ふやうになるものもあらう。然し、其の連中の内には自分の所で出來た卵を買つて行く仲買の状態を見て自分



の所から三錢で買つて行つて、一里か二里も擔ぎ廻り無駄口をきいてる間に六錢にも賣つてをることが分る。年中朝早くから注意して鶏舎の掃除などに骨折つて一個三錢に賣るのだ、仲買は何も格別な苦勞がなく矢張り一個三錢づゝの口錢を取つてをる。之が氣付かなければ餘程ぼんやりした百姓で、あたり前の頭で利をのみ思つたら、鶏を飼ふよりも卵を買集めて賣る方が儲かると悟る。聽て農業をやめて商賣人になるので、利を以て喰はすれば斯ういふことになるのは當然である。

西洋で農業は技術であり業務であり且科學であるといふ事を先刻も申し述べたが、更に近時はも一つ加へて農業は生活であると説いて居る。昔の自給自足の世は云ふまでもなく、また農業による外に生きて行く途がなかつたといふやうな時代は別とするも我が日本の現在の農民も多數はただ生活するために農をやるのである。こゝで一寸餘言ですが百姓といふ言葉は如何に分析しても、作物を育て動物を飼ふといふ意味をもつてをらぬ。何故に此の言葉が今の意味となつたかは、萬民の生活するために爲し

てをるもの即ち農であつたからである。後に社會が進んで農業を營まないでも生活が出来ることとなり、商や工が發達して企業といふやうなものが表はれ、資本主義が盛んに行はれるに至つたのである。現に我が邦でも農を企業として營んでをるものも尠くないので、蔬菜を栽培して全部賣出し自家の飯米その他は買つて居るものがある。所によつて斯の如き企業農をやるのは元より望ましいが、日本の農業者を全部左様な經濟主義の収益本位のものにする事が出来るかといふと、それは少くとも當分は實現の出来ることでないと思ふ。

其の點に於て、現在の農業獎勵法は間違つて居ると言つては過ぎるでせうが、一つの大きな缺陷があると云つてよいと思ふ。元來人類は生活の爲めに努力するので豊かな生活をするために手段として金を入用とするだけのこと、金がなくとも食つたり着たりする材料に事缺かねば良いのだ。金は使ふためのもので唯つんで置くだけなら儲ける甲斐はないのであるが、今まで動もすると手段たる生産のみを説いて本尊であ

る生活そのものを忘れた弊があつたかと思ふ。現に世界思潮の一流として此の文明を覆へして新に建直さなければならぬといふ論がある。近頃わが邦でも評判になつてをる有名なシュベングラ―は、「西洋文明の没落」といふ本を出し、西歐中心に發展した現代の文明も最早や終に近づいたと主張してをる。抑も人間は土に依つて生きて行くべきものであるのに土を離れて得意になつてをるのが悪い。本來に還らなければならぬといふのが思想の根底をなして「土に還れ」と叫ぶのである。

小學校に於ける農業は斯う考へて、利益本位な生産とばかり思つてはならぬので、寧ろ人間に役立つ作物や家畜を育てる、土地といふ大自然によつて人類は生活する、かういふ點を重んじて考ふべきである。利益を無視してもよい唯美しい花をつくり兎などを飼ふだけでよいと云ふのでは決してない。小學校に於ける農業の教授要綱案は既に發表されて御承知と思ふが、あれは未だ完全なものでもなく必ずあの通りにやれ

といふ意味ではない。ただ其の標準とすべき一例を示したので、地方の状況などによつて取捨されたら大概よろしきを得るものと考へてゐる。尙實地その局に當らるゝ皆さんの御意見を伺つて修正したのであるが、以上申し述べたやうなことを御考の内に入れて御覽を願ひたく、その趣旨の存する所は十分に御酌み取り下さることゝ思つてゐる。従前のものに比して殊に注意されたのは、農業を單に技術とし生産業務とのみ考へないで、例へば農村に於ける生活といふやうなことを加へた點にある。その他人類と自然との交渉關係を悟らしめようといふなど、嚴密な意味から言へば農業でないかも知れぬ、又農村生活といふ事項も農業そのものとは別であらうが、然し夫等をも含めて教授事項が定めてある。

教授には設備が必要である。或程度のものとは是非とも無ければならぬが、さればとて設備さへあれば大いにやるがと云つて、無いのを口實とするわけには參らぬと考へる。本省で招集する學校長の會議に多く出る問題は、教職員の待遇を向上すること及

び設備に對する國庫補助を要するといふことで、何れも尤もな事ではあるが、設備は財政との相談であるから無暗に完全を期すべきでなく、あるだけで教授の内容と方法を飽くまで考究せねばならぬ。私は寧ろ趣旨が徹し意見が立てば、必要なだけの金は左ほど難しくないやうに考へて居る。先般の改正に伴つて直に一反歩程の實習地が要る。それが出来たら大いに農業を教へようが、その設備がなければ効果はないなど、一向に力を盡さぬのを見受ける。實習地が有るに越す事のないのは勿論だが、無ければ全くやれぬといふものではない、無いなりにでも或程度まではやり得ると思ふ。

學校がある以上は必ず幾分の校地はあるので、其の校地には教室建物以外に運動場があり、垣根もあれば立木もある、少し考へれば其の間に利用し得る土地の二坪や三坪、或は一畝や二畝の餘地があるもので、建物の角や運動場の隅などに數十株を植ゑる場所は決して探し難くない。苟くも小學校があれば幾干かの空地があり必ず木が植ゑてある。鐵筋コンクリート造りで庭に植木のないものでも、ルーフ・ガーデンを工

夫すれば草花など立派につくれる。農村の學校であるなら校庭の樹木を實習材料としても出来ると思ふ。近來は餘ほど進んだが能く小學校で校庭の荒れすさんだのを見受ける。實習地に行つて見ると綺麗に雑草もないのであるが、玄關先きにある樹は枯枝も取除かれず校庭の隅には雑草が生えてゐるのを見る。庭木の根元を兒童の踏むがまゝにして少しも保護せぬやうな學校では、實習地だけで如何に骨折つても本當に望ましい農業教授は出来ぬと思ふ。先づ校庭の樹木を大切にすることを教へ、出来るなら其の周圍二尺ほどを圍み、兒童の濫りに入らないやうにし、そこに草花の二つ三つ作るなども甚だ望ましい。また極端なことを云へば唯その周圍に藁繩を張つてもよく、時折に白墨でぐるつと圓をかくだけでもよい。斯くして樹木の根元は踏まぬがよいと教へたいものだ。尤も子供であるから遊んでゐて踏むことは多からうが、其の場合に罰するなどは宜くないと思ふ。ただ此の邊のことにも注意させるといふのが目的で、よい教材とすることが出来るのであるから、徒に特別な實習地のみを考へないでも、校

庭に於ける草花や樹木を思ふべきである。校地全體を實習地と心得て利用せんとすれば可なり出来る。稻などでも鉢で一株を立派に生育結實せしむることが出来るのは御承知の通りである。

また農村であるから到る處に農業が行はれてるので、校地全體を利用するのみでなく、更に進んで其の村全體を學校の實習地と見たら宜いと思ふ。亞米利加でプロジェクト・メソッドと呼んで評判なのがある、我が邦でも可なり以前から家庭實習といふのがある。又アメリカに於ける兒童のクラブ——玉蜀黍や鶏などが殊に評判である——でのやり方は、家庭で農業を實地にやらせるので、それで立派に農業教授をやつて居るが、斯ういふ方法を加へて行けば必ずしも學校專屬の實習地がなくても、家庭での作業も監督し指導してゆくことは出来る筈である。

教師は優良の人でなくてはならぬと考へる。元來農業は生物を取扱ふのであつて、

生物は季節に應じ寒暖によつて常に動いて居るもので、工業とは此の點で大に趣が違つてをる。即ち農業の仕事は人の時間のみを以て計る事は出来ないのである。私は能く農學校などで云ふのであるが、實習の時間は開始の時だけは定めて置かねばならぬが終る時は定むべきでないと思ふ。勿論大概な見當は付けて置かなければならぬが、例へば午後一時から實習を始めると定めて、凡そ二時間なり三時間で終る豫定はあつても、四時は終了時など、時間割に定め置くべきでない。斯く生物を取扱ふのであるから人の思ふ通り機械のやうには運ばぬといふ考をもつことが大切である。小學校の實業五時間は凡そ教室内のものを定めたので、此の内で行うのも元より差支ないが、實習は此の時間外に出ることを始めから豫想して居る。随つて教師も只或定つた時間だけ勤務したら良いといふのでなく、日曜その他の休日であつても作物や家畜を忘れてはならぬ。鶏などは正月元日だからとて餌をやらぬでは濟まぬ、人が雑煮を祝ふだけの心持で持にいたはつてやる心得が必要で、農業擔任者は餘ほど多くの時間を勤

めねばならぬ。それが不平になつて他を羨むやうでは、早く決心して此の教師たることを止める外はないと思ふ。

農業を擔當されてゐる方々は別として、農業を擔當せぬ訓導諸君には別に要求がある。即ち農業擔當教師は夕刻迄も脚絆をはいて働いて居るが、他の先生は三時過になれば校庭でテニスなどをやつて遊んで居る。さういふ事では農村の教育は到底成果を收め得られぬと思ふ。私は農村に於てもテニスをやつて悪いなど、決して排斥せぬ。テニスもベースボールも甚だ結構で農村にも大に奨励したいと思ふ。然し、時期があるので唯自分の擔當時間は濟んだからと言つて、村の農事の忙しい折に他への思ひやりもなく球遊などをやられては困る。決して單に農業擔當の先生の爲のみならず、農村の風俗を害するものと思ふ。仕事を片づけて早く家に歸つて來た青年相手に、足を洗ふ前に一ゲームやらうといふやうなことなら誠に結構な事と思ふ。農業擔任の先生が骨折つてゐる時に、村民が懸命に働いてをる時に、之を横に見ながらテニスをやる

といふのは實に怪しからぬ態度で以ての外の心得違である。かゝる同情なきものは農村の教師たる資格なきものと認めてよろしく、環境に應じて行動せねばならぬものである。

或農村の學校を視察して深く敬服してゐるのがある。其の場所は餘り言ひ傳はつて皆が押しかけて行かれたら迷惑だらうから態といはぬが、或小さい農村の學校で始め實習地がなかつたのである。校長始め先生方が大にやらうと考へたが容易に村當局の諒解を得ない爲に實習地も出來なかつたが、幸に其の村には可なりの河があつて平時は水が少く廣い河原がある。そこで此の河原に少し手を入れて運動場とする事を考へ生徒と共に職員總が、りで働いて、學校の運動場を打ち起して畑にして實習地をつくり、今では乳牛一頭を飼つて其の乳は校長始め總ての先生が搾つて居る。教師など最初は困るらしかつたが、間もなく皆馴れて搾るやうになつた。畑は校長始め男の先生は二畦、女の先生は一畦を作り、小使に至る迄分擔の畦があつて栽培してゐる。何も

蔬菜などを作るのみが學校の農業でないと思ふが、苟も農村の訓導たるべき人は農業に對して農民に對して理解と同情がなくてはならぬ。

尙工業や商業でも同じであるが、殊に農村に於ては單に學校兒童のみが相手でないといふことを、教師は覺悟してゐなければならぬ。と申すのは學校で何か一つ作るに村の人達は必ず見て批評するので、下手な事をやると評判が悪くなる。所が學校の先生に、村の老農に立勝つた技倆を持たすといふことは必ず出来ることと期待されないだらうから、教師の心掛くべき事は自分達は百姓に立優つてゐるといふ考を捨てるが大切だらうと思ふ。私は大學を出て新に就職する若い友人には常に注意する、「君達立派に勉強してゐるから萬事農民の指導者であるを考へたら失敗の基である。三年や五年學校で教はつても祖先傳來の實業に従事してゐる百姓には負けることが多い。勝つて居るのは唯理解力や判斷力であるから、新に赴任したら先づ其の地の老農に就いて自

分が學ぶといふ事が大切である。それを見聞し判斷して行けば、頭があるのだから、彼等に優る斷案を下すことは出来る筈だ。最初は多く當業者に劣つた實績を擧げるだらうと自認して居るがよい。二年か三年かする内に必ず近所の百姓よりは優れて良い物を作る事が出来る。如何なる村でも重要なものは僅に三四種に過ぎぬので、それ達しさをすれば百姓を心服させることが出来る。學校時代には何處に赴任するか分らないから色々やつて置かなければならぬが、學校を出た以上は先づその土地のものを當業者に學んで行くやうにすれば、終には農民の心服を得て眞に農民の先生となる事が出来るやうになる。」この心掛があつたら學校の生徒のみ相手としないで、村民を相手として信用を博するに至ると思ふ。

今後はさういふ事もないだらうが、これまでの農業擔任の先生には随分困つたのが少くなかつた。學校の芋はごうだあれでも畑をつくる積りださうなど評判され、熱心にやつては見るが甘く行かなかつた。殊に學校には夏休があるから、人は休んでもよ

いが作物には夏休はない。此の夏休は或意味で廢さなければならぬと思ふ。師範學校などでも農業を必修科目として實習をも課してゐる以上、作物の生育期間として肝要な夏季に生徒が一人も居らぬといふのではつとまるまい。夏の長い休の間は誰も生徒が作物を顧みぬといふのなら、實習を廢した方が宜いと思ふ。苟も畑に作物を作つて居る以上、其の世話をしないといふ事はないと思ふ。未だ少數に止まるのは残念ながら、幸に師範學校でも近來この點に注意されて來た。無論全部の生徒を留めるには及ばぬ、毎日二人ぐらゐづゝも交代で農場に居るやうにすればよいので、決して生徒に對して氣の毒とか無理とか考へることはない。

中には何でも近所の百姓の作らない物を栽培して、巧拙の批評を免れようとする横着な先生も出たこともある。東京の種子屋から取寄せて新輸入の珍しいものを作る、百姓は始めて見るのだから不出來でもこんなものかと思つてゐる。お茶は濁せるだらうが、それでは生活に即した教育といふことが出來ぬ。矢張り其の村で作る物を探つ

て教材とせねばならぬ。或所では普通な何處の家でもつくるものを兒童に栽培させた所が、一年二年してゐる内にお前が學校で作るなら農家は其の栽培を差控へ、子供が學校で作つた物を自家用とするやうになり、學校と家庭とがピッタリ合つてゐるのを見たこともある。子供が休んで仕事がおくれた時など、父兄が學校の畑に來て兒童を助けて働いてをる。

斯の如く學校では概して其の土地につくる物を取扱つて行くべきであるが、ただ立派に作りさへすればよいかと云へば、其處は飽迄も教育であることを忘れてはならぬ。技術それ自身を仕込むのが目的でなく、學校は徒弟を養成するのではないから、矢張り原理原則を授けて理解せしめ判断の力と應用の才を考へてゐねばならぬ。一々手を取つて繰返させるのは舊式の傳授に過ぎぬ、琴の師匠が自ら謠ひながら弾いて見せ、その通りに繰返して覚えさせるといふのは舊式だ、學校では譜に従つてやつて行くの

である。其の方法が悉く悪いものではないが、實際の方法によつて其の原理を悟らしむるやう、たゞ方法だけでもいけなければ定義などを空に暗記させるのでもない。常に考へて居るべき事は技術方法それ自身は中介であつて、それで原理原則を納得せしめ、それを重ねて農業に對する推理判断の力を養ふといふことである。動もすると時間を澤山取つて子供に筆記をさせたりして居るが、全く無益であるばかりか却つて害があるとも考へられる。五時間の時はどういふ風に使つてもよいが、あれで教室の授業も實習もやらなければならぬと考へるのは誤解で、成るべく過多に陥らぬやうに考へることは勿論、五時間以外に實習は相當にとつてよいのである。

作物に對する注意は寸暇を利用して見廻り保護することが必要で、ただ特にあてがつた時間内だけでは愛情が通じぬ。成るべく殊に覚えねばならぬやうな事は分量を少くし、作業の間に觀察の折に何時となく悟らすやう導きたいものである。従來の教科書は餘りに抽象的に過ぎて、農業とは何々するものとか、肥料の効能はかくくとか

いふのが多く、ただ暗記するのみで望ましくなかつた。稻について教へるにも、稻の播種量だの苗の挿方などは末で、何故これほどに播くがよいか、此の肥料は何故に斯く施すべきかといふことを分らせる。稻だけは覺えたが麥のことは更に見當がつかぬといふのでなく、稻を教へたら如何に小學生とはいへ、同じ禾本科の麥についても幾分察し得るといふやうにせねばならぬ。一々その方法を傳授するのでは到底やり切れない、大切な點を一つ解らせて置いたら、學校では少しも習はなんだことでも、家で或程度までは自ら工夫してやつてのけられる。斯う考へて餘り多くのことを採らないで、僅の教材でも宜いから能く擇んで徹底せしむる、それを理論化するといふか、歸納するといふか、十分に注意せねばならぬと思ふ。

要するに、小學校の農業に於ては他に種々必要な事もあるが、作物を育て家畜を養ふ秘訣は、それ等を受するといふ事である。茲に至ると農業は單に利益のみでない兒



童それ自身の心持である。即ち種から芽生へてゐる苗を踏潰して平氣なやうでは、農業教育を完うした物でない。別に將來どうするといふ考はなくとも、取敢えず放置するには氣が落ちつかないで、踏み潰されぬ所に植ゑ換へるといふ心持を有たするので斯る心が出来れば農業の教育は立派な成績を挙げたものと思ふ。校庭の櫻の枝を滅茶苦茶に折るといふ子供の多い間は、其の學校の農業教育は未だ徹せぬものと云はれよう。其の一本の櫻も農業を教へられた兒童が可愛がるやうであつてほしい。この心は小學校時代に最も芽生をつくり易いであらう、その完成は後日に期してもよいと思ふが、風で倒れかけた樹を起してやり、枯れるまでは葉の赤みが、つた樹にも水をやるといふ、その心情と態度を養成したいものである。斯くて卒業後農業に従事しない者に對しても、よく偉大な感化を與へて眞の教育に効果があるのであらう。一反歩に播く籾の種量は忘れても、飯粒を粗末にせぬ心が出来たらよい、農を教へるのも結局は此の心が目標であると思ふ。(昭和二、九 初等教育研究会にて)

## 五 師範教育改善の聲に和して

我が師範教育の改善に就いては、盛んに論議されて居る通りに、その修業年限、入學資格、學科の配當など、幾多の研究すべき問題がある。然し、茲には夫等を説かんとするのでなく、農村教育といふに廣くも又狭くも考へられて説明を要するが、立場から、卑見の一片を述べて大方の高教を請ひたいのである。

農村問題が喧しくなつたのは、決して現下の我が邦に限らないで、歐米の先進文明諸國に何れも同じ現象であるが、例へば離村に就いては、「田園へ歸れ」(Back to the Land)とか、地方植民 (Rural Colonization) とか、いふのを物足らじとし、「田舎へ突進せよ」(Forward to the Country) と呼び、農村生活運動 (Country Life Movement) を唱へるやうになつた。その見方は人によりて色々あるが、要するに現代の文明が進

むと共に、農村の發展が之に伴はぬのを憂ふるので、その衰退の傾向は自然に放任して置けぬ、之が維持振興を講せねばならぬといふに一致してをる。而して、之は初め農業の爲にと、斯業に關係ある方面の人々に唱へられたが、今は國家の爲に社會の爲に必要なといふので、農業と直接に縁のない人々に注意せられ、社會の改良を志す人までが論ずるやうになり、政治家なども相競ひて之を説くことになった。

謂はゆる農村問題は、その根柢が經濟のみでなく、廣く教化や法制やに亘り、深く社會の髓心に喰ひ入り、人類生活の本質に達して居るから、之が解決は、決して單に農業の進歩や農業の發展のみで出来るものではないと一般に信せらるゝやうになった。また、制度を改め機關を備へても、その運用が良く行はれねば甲斐はない。村民の教化が最も根本的のものであるは論なく、各種の方策と合せて、之を教育の方面からすれば、先づ國民教育の基礎たる小學校に重きを置いて考へねばならぬのである。

小學教育を考へるといふのは、その農業科をのみ問題とする意味ではない。モット

深く廣く、小學兒童に趣味といふべきか思想と呼んでも良からう、寧ろ一の信念とも云ふべき、確乎たる或ものを涵養せしむるやう考へねばならぬ。科目や教程よりも、教師その人の感化を主とすべく、随つて師範教育に先づ思を致すべきである。

英や佛や獨の古い諸國にも、元より之が論究は盛んであるが、米國は新しい土地でありながら此の問題が随分やかましく、故ローズゼルトが招集した調査委員會にはより良き農法、より良き經營、より良き生活といふ三方面を肝要とし「田園の社會改造」を叫んで、農村中心人物の養成に努め、農學校又は師範學校に於て之が施設を爲してをるのである。

丁抹は、其の農村事情が甚だ羨むべき状態にあつて、此の點で世界に冠たりなど、云はれてをるのは理由がある。その能く斯くならしめたのは、特種の國狀の然らしめたのであらうが、亦その國民高等學校に負ふ所が最も大なりといふのは、説の一致し

た所である。而して、その國民高等學校に於ては實業の精神は甚だ重要視するが、謂はゆる實業教育を施すのではなく、農業科目を設けぬものさへ甚だ多い。その教養の主旨は全く別にあつて、一の思想を涵養し信念を構成せしめ、飽くまでも人物を造るといふことを努むるのである。

我が邦でも、地方の男女師範學校に於て將來小學教師たるべき生徒に對し、十分に此の思想を養ひ此の信念を獲得せしむるやう、有ゆる方法を講じたのである。生々たる人物の養成と健全なる思想の涵養とは、元より一二學科の加設を以て爲し得らるゝものでなく、學校の教養の全體に亘ること、總ての科目を連絡融和せしめ、始めて後に結ばるゝ果實に外ならぬに相違ない。而して茲には其の方策の一端として、新に一科目を加設したいと提唱するのであるが、たゞ、此の諸學科を連絡統合するに助あらしむる爲である。

教育の沿革を茲に繰回して述べるまでではないが、最初に實用を以て完しとしたのを人文科に重きを置くやうに進んで却つて空理に馳せることもあり、謂はゆる實學と呼ばるゝものも起つたのである。近來に至つて實業科目の教育説が出で、獨のケルシエ・ンシユタイナーなどは有名であるが、實業を教へるは技倆を授くるといふよりも、以て品性を陶冶し性能を發揚せしむる教材とすべきだと説いて居る。米のデュエーの論ずる所も亦その趣旨を同じうし學校は夫れ自身を社會とし、その内に兒童を生活せしむべく、生活は即ち職業によつて始めて爲し得らるゝのである。

農村の兒童であるから、成長した後には必ず農夫たるべしとの豫想は出來ぬ。農村に生れた子弟であるから、邦家社會の爲に將た農業の爲に將來農夫たるべしと強制することも出來ぬ。今の世では成長した後に、何の職業に従ふべきかは各自の自由で、之を決定するものは一に兒童自らの性能である。教育の責務は兒童の天賦を見出し、その長短を知つて適否を判じ、各その職業に指導すべきであるから、廣く人生の諸相

を示し、自由に且適切に選擇せしむるやう努めねばならぬ、而して選定して後に特にその教練を爲さしむべきである。小學校で農業を教ふるのは、決して、之を以て兒童生涯の職業を限定しようとするのではない。如何に農村とはいへ、農業者以外のものも居住して、夫れ等の子弟も少からぬのである。農村で農業を教ふるのは、能く兒童の環境に適し、之を教材として各自の性能發揮に甚だ便宜である爲だといふ一面を思はねばならぬ。また、彼の手工が教育に重んぜらるゝ意味を汲み、自然研究 (Nature Study) が高唱せらるゝ趣旨を考へ、農は人類生活の資料を得るために原始社會より今日に繼續發達せるものたることを思ふべきである。

由來、實業學科を教授すると云つて、動もすれば、技術の末に流れ、若くは實利を是追うた弊がなかつたか。その方法を誤れば却つて害があるので、實際農業を教へて不快な薄利な業務だといふ觀念を生徒に懷かしむるに終ることが少くなかつた。技術は實業の根幹であるから極めて大切だが、皮下を流るゝ養液ともいふべき精神に不足

があつてはならぬので、徒に生産をのみ是れ圖るが如き弊は此の不足から來るのではないか。専門の農業學校でも然うであるが、殊に小學校に於ける農業科で深く思ふべく、師範學校に於て最も考慮を費すべき點であらう。

現に我が師範學校では多く實業を授け、過半の生徒は農業を學んで居る。それを擔當する教諭の學力、位地が不満足といふこともあらうが、兎角に斯學科の輕んぜられるのは、大概農村から出たのであるが元來農業に従ふを好まないで、職を農以外に求めて茲に來たのが多いからでもあらう。それをして現代の都鄙生活を對照せしめ、藝術や科學を味ひ始めた時に、平凡な事物を取扱ふ農業である、拙な教へ方で徒に記述や方法を示され、且、趣味なく勞役に従はねばならぬといふのでは、到底農事を樂しみ農村を味ふやうになることは難しい。

此の農業科に就いて諸種改善すべきものは多く、實際に其の效績を擧げ得べき見込もある。然れども、叙上の趣旨を此の農業科でのみ成就することは決して出來もせず、

農業科の目的は亦さうしたものでないから、別に一學科を新設したいと主張するのである。或は現在の農業科の内を幾時間か割いてもよいが、今日の農業科擔任教師で之を爲し得るものは多くあるまい。全く新たなものとして考へ、新に始むるものとして扱ひたい。

丁抹の學校では、國語の外にも甚だ歴史を重んじ、例へば農業學校でも多くは農業史の一科を特に置いてをる。歴史を過去の記録に過ぎぬとするものは最早あるまい。社會生活の報告に過ぎぬとするのなら左程に重視するには及ばぬが、歴史によつて人類生活の價値を悟らしめるので、社會的に産業的に政治的に宗教的に、現在を理解し將來を想像せしむるために歴史を重んずる。農業の發達や農民生活の沿革で人間生活の跡を尋ね其の歸趨すべき理想と標的とを示すのが、丁抹に於ける歴史教授の努むる所である。更に進んで理學や數學にまで歴史的教授と稱しラ・クール (La Cour) が

アスカウで教へた數學は興つきぬものであつた。埃及からギリシヤに及んで幾何學を説き、「零」を發見した印度によつて代數の觀念を授けた。「純粹の數學的方面に於ても、人類進歩の跡を辿る方が早く確に悟らしむ」とは、同教授の永い經驗の後の述懐である。

米國では農學校でも國語を非常に重んずる。之を常識養成の教材とも爲すので、文字や語句の解釋に止まらぬのは元より、情操趣味の涵養に努めるのみでなく、之で専門以外の一般智識を授けようとするのである。近年に至り更に田舎社會學 (Rural Sociology) と呼ぶ一新學科が畧ば成立せらるゝに至つたので、之を置く學校數は農學校師範學校に年を追うて加はりつゝある。その内容も未だ定まらぬものであるが、趣旨に甚だ面白い取るべきものゝあることは疑はれぬ。『農業本論』に地方(ちかた)學(Ruriology)＝村閭學、郷土學と呼ぶもよからうの可能を論じ、その材料の蒐集と研究を勧めてあるのは甚だなつかしい。

農業は人類生存の資料を産出するものである。農村は現代著しい發達を成しつつある、都會に對し相並んで人類生活の一舞臺である。地球を一步も外に出づること叶はぬ人間は、土から衣食の原料を得て生存する。その自然を制服するといふよりも之と調和して進む農行爲は誰人も理解して居らねばならぬ。此の意を十分に徹底せしむるものが新設學科の目的で、即ち人類の生活を理解せしむるに、根基の一たるべきものと云つて良からう。それには、人類の發展から自然と人間との交渉に及び、進んで現代の都鄙が經濟的に相關連せる所以を説く。教材の内容としては、地理が基礎となり歴史と經濟を按配し、之に自然界有機無機の現象が織込まれ、政治や思想や人文科的にも彩色されるだらう。

近來公民科を説くことが頗る盛んで喜ぶべきだが、産業史や經濟地理を普通學科と考へて之を小學校や中等學校で授くべしといふ論の、未だ我が邦に盛んならぬのは殘

念に堪へぬ。茲に提唱する新學科は、斯の産業史と經濟地理を合せ、更に自然現象の智識を多く加へたものである。公民科と甚だ良く似た點がある、兩者共に基礎を同うしてをるが、たゞ其の上に築かるべきものを異にし、一は法制經濟を幹とすと云ひ得るなら、他は技術を柱とし自然科學を棟とすと云つても良からう。而して、此の新學科の内容は元より未だ出來て居らぬ。その名稱なども何と呼んでよいか更に定め兼ねるが、今は趣旨を十分に明瞭にするのが急務で、それさへ出來たら、之を生活史といふのもよからう、産業總論といふのもよい、又は村落社會學でもよいと思ふ。

一學科を新に組織すると云へば、嚴密には實に容易ならぬことであるが、茲に云ふは元よりそんな意味ではない。實際は随分面白い講義を爲し得て、左程に難しくないものが出來るだらう。従來は「農は國本である、最も貴重である」といふやうなことを説いたが、商は末であつて賤しいなど云ふ何等の理由ない時代となつて居るのだ

から、斯かることは却つて害こそあれ、決して農民の思想を養ふ所以でなく、また一般の人士に對しても何の役にも立たぬ。農村に生れた兒童にも、少數ではあらうが家庭が職業として農と關係なきものもある。農家の子弟でも將來は都會に出るものもあらねばならぬ。また、村に留まつても商となり工となるものもあるだらう。茲に云ふ新學科は昔の尊農論とは全く別途に出で、産業の何れとも同様に農業の重要な所以を説くべきである。農民に農の獨り貴きことを知らしむるのでなく、國民に生活の基礎たる産業の重さ貴さを悟らしめようとするのである。動もすれば輕んぜらるゝ農業の真相、その使命を知らしめようとするのである。

農業は引合はないでも、邦家の爲に大切だから従事すべしと、犠牲的奉公にのみあきらめ的に説くのではない。農業を引合はぬと云ふのは一の標準によるのだ、それが唯一の標準でないことを教へねばならぬ。農村は面白くないと云ふ見方もあるが、その見方が唯一のものではなく、尙外にも標準があり度量があり、それによつて計れば

農業必ずしも引合はぬものでなく、農村は決して詰らぬ所でないことを理解させるのである。

生産とは價值をつくることである。價值は效用により消費生活によつて定められる、その價值を計るに常に貨幣を以てし、貨幣を中心として今までの經濟學は發達したが、既に行つまつたので更に展開せねばならぬのである。その新しい方向は生活の安寧幸福といふことで、之は貨幣にのみよつて決して計れるものではない。貨幣の外に價值を計る單位を従來は知らなかつたが、當にその新しい計量の單位をつくらねばならぬ機運となつた。斯の新しい度量で計れば、農業は随分利の多いもので、農村の生活は甚だ望ましいものとなるに相違ない。

言ふまでもなく、此の新學科を小學校の學科目とするのではない。たゞ之を小學教師たるものに授けてその感化を兒童に及ぼし、以て兒童思想の涵養に資せしめようこと

するのである。而して、此の學科は必ずしも農業科とか家事科とかを受持つ教師にのみ授くといふのでなく、一部生と二部生との別なく男女を通じて總ての師範學校に設け、之を或期間全生徒に教授せねばならぬのである。

斯の新學科を擔任するために、別にその専門教師を置くやうになるのは悪くはなからうが、夫れは當分の間にも合はぬし必要とも思はれぬ。之を歴史または經濟の教師に兼擔せしむるもよく、博物または地理の教師に兼擔せしむるも好いので、農業科の教師に受持たすることも甚だ良いと思ふ。それで目下の實際策としては

一、男女の高等師範學校で特別な該科の教授をなし、地方の師範學校で之を擔任し得るものを養成する。此の擔任教授は現任者で兼ね得らるゝだらうと思ふが、特に講師を置いてもよいので、二校を兼ねてもよく數名で分擔するもよく、二三のその人を得れば、決して出來ぬことあるまい。

二、地方師範學校で適當な教諭を物色し、此等を集合して講習會を開催する。その科目は大に考慮を要すべきであるが、二三の中心たるべきものを主とし、科外に適宜選定することは難しくなからう。

尙女兒の教養は田舎社會の問題を思ふ時に、特に留意せねばならぬことである。人類生活が、男女相並び相助けて居ることは言を待たぬので、之を經濟に就いて見ても一は生産を主とし一は消費を主とすと云はれ、殊に農業と家政といふ兩者の關係は甚だ密接である。

歐米の先進國では、夙に此のことは深く考へられ、十全とは云へないでも何れも相當に施設されて居る。獨では農業家政學校といふのが各地に設けられ、農村社會の維持發達に多大な効果を擧げて居る。英では農場學校といふのが、冬季には男子を夏季には女子を收容し、各その適當な教養をなして居る。丁抹の國民高等學校が女子に對



しても男子と全く對等に大に盡しつゝあることも思ふべきで、我が邦の現況にあつては此の點に深く考へねばならぬものがある。農學校出には喜んで嫁がぬといふ女學校出の多くの女子があるやうでは、頗る寒心に堪へぬのである。後の女子教育は最も深く茲に留意せねばならぬ。農業や園藝を課して居る女學校も多いが、師範學校に於けるものと甚だ似た傾向があり、現代にあつて妙齡の女兒を驅り、圃場に泥土糞尿を手にしむるのであるから、思つても思はねば結果は必ず反對となる。

米國で近年「家庭經濟」(Home Economics)と畧ぼ用語も一致し、頗る盛んになつた家政科は、何れの學校でも多數の女生を收容して居る。文學や醫學を學ぶ書生も少くはないが、矢張り米國でも女子は最大多數が此の家庭經濟學を修むるのである。而して茲に深く注意すべきは此の家政科は、諸大學で多く農學部に附庸し、生産の農學と消費の斯學とが相對立提携して居ることである。綜合大學の内でも最も多數の學生は農學部に屬し、その内で家政科の女生が甚だ多いといふは、米國の國情にもよる

だらうが羨ましい程の事實である。

最近に或學友 $\parallel$ 學校を出て以來久しく俸給生活をして居たが、期する所があつて故山に歸り大に農村の爲にせんとして居る $\parallel$ から受取つた書中に曰ふ。

「田舎に塾居して半年、農村に直面して聊か研究の結果、農民の半可通無自覺に全くあきれた。産業組合農業倉庫の如きも其の精神運用を誤られ、監督の任にあるものも經費の都合か善導せぬ。一例を挙げれば、信用組合の預金の如きも(當村にて貳拾萬圓弱)大部分を地方三四流のポロ銀行に送り、金利の多からんこと、従つて配當の多からんことに腐心して居る結果、元金の回収に困却して居る等、將來に於ける農村經濟の混亂の暗影とも認むべきものすらある。現在に於ける農政施設の形式と内容との間に大なる距離あつて、目下は利害俄に判定し難い状態である。農村の急務としては、農民教化が第一で如何に政府が各種の補助法低資融通等を講せら

るゝも、只今の所では農民は他力本願を益々強むる位が關の山で、親の心子知らずの結果となるに過ぎまい。云々」

と、これは四國での實況であるが、その他多くの地方でも同じ状態であることは疑ふの餘地はない。小作争議や其の他の農村問題に就いて論究すべきことは多いが、農民に限らず一般に國民といふべきであらうが、その教育に關して幾多の急に迫つたものがある内にも、以上の師範教育改善に關することは、その一片鱗に過ぎぬとは云へ、亦大方識者の考究を待つ情禁じ難いのである。

× × ×

師範教育改善に關する論議は多いが、その内でも所謂「師範氣質」のことはその根原の一が、従來の寄宿設備、制度、訓練、傳統等にあるやうに思ふ。又學力の不分といふ點は、義務教育年限の延長と伴ふが、修業期間を延ばして高い教育を受けしめれば教師の俸給を増さねばならぬ。大に増俸したいのは山々だが、左なきだに困つ

てを町村は、到底これが負擔に堪えぬといふのである。

それで師範學校の年限は必ずしも多く増さないでも、卒業してから後に修養を積ましむる工夫を希望する。之は決して獨り小學教師にのみ要求すべきではないが、一體に學校生活を終り初めて社會に出た時に、多い俸給を貰ふのは却つて良くない。出たてには獨身で氣樂な餘裕のある生活をするが、家族が増し年齢が加つても俸給は其の割に増さないで、暮向は決して進まぬといふのが現状である。また、學校を卒へたと云つて讀書や研究を止めてはならぬので、實生活に入つて後の學問修養こそ眞に味のあることは言ふまでもないが、兎角に其の日を過して勉強も出來ず、亦それで濟んで行くといふのが當今の實際である。

師範學校を卒業したものに、直に正教員たる資格を興へぬことゝし、助教師として一二年の修練経験を積ましむる制度は如何であらうか。試験一なものでは良くな

い。試問應答や論文報告や監督者の評定などを合せて考査すべきである。を経て初めて正教員たる資格を授けるのである。尙正教員にも二三の階級を設け、相當の年限を置き一定の考査で昇級せしむることにする。其の上級のものでなければ校長にはなれぬやうに定め、俸給は初めは少いが、年を追ひて階級に従ひ漸次に確實に昇進するやうにする。現在の平均級總額でも今一段と優遇することが出来ようと思はれる。一度實地に經驗した後には研究科や専攻科に入つて更に研學するのは、甚だ効果の多いものたることは疑ふの餘地なく、此の専攻科への入學を更に簡便し現職のまゝ俸給全額を支給するなどならしめ之を昇級の條件たらしむるは尤も妙であらう。

デンマルクの小學教師は、師範教育を受けて後に、奉職して三年間その校長の下に助教として練習するのであるが、成績は甚だ良いと一般に認められて居る。此の助教師制度で今の附屬小學校での教生制度を一部は省くことも出来ようと思ふ。

(一三、七、二〇)

## 六 實業補習教育に就て

### 實業補習教育とは何ぞ

これは即ち青年の教育である。兒童でもなければ完成された大人の教育でもない。形は畧ぼ整つて居るが中味は未だ十分熟して居らぬ青年に對する教育である。而も其の青年が學習を専門として居らないで、此の世の生活をなす爲に一定職業を持つて居る——その餘暇に授くる教育である。最近我が國でも此の補習教育が漸次盛になりつゝあるが、之は以前からも随分唱へられて居たものゝ、殊に先般大戰の影響を受けて何處でも非常に喧しい問題となつた。彼の英國に於てはフィッシャーが文部大臣となつて斯教育に一大革新を加へた。彼の計畫した制度は大評判であるが、實際今後五十年か百年の後になつて顧みたらば、確に補習教育のみでなく一般の教育制度に一時代を劃するものであらうと思ふ。

思ふに従來の教育といふものは、或特別な人間のみに限られて居て、教育の機會均等ではなかつた。今後に於てはどうしても其の機會を均等に與へなければならん。補習教育が重要視せらるゝのは、此處にその一つの理由がある。即ち補習教育は小學校卒業後進んで中學校又は女學校に入り得ないものに、而も數に於ては非常に多い人々に、教育の機會を與へるものである。

抑々教育なるものは、最初役立たしむる爲に起つたものである。其の始めの内は親が子に教へて濟んで居たが、漸次に進歩して専門家の手を煩はすやうになり、親はそれ等教育家に子供を托する様になつた。併し其の中でも永い間教育を受けて行けるこいふ者は極めて少數であつた。大多數のものは十分に終まで教育を受け得ないで餘儀なく實生活に入らなければならぬ次第であつた。それで元々教育は實用を主眼と致して居たが、その高い教育は特權階級に獨占せらるゝ様になつて、實用を次第に離れて却つて普通人には用のない難しい事を學ぶのが教育だといふやうになり、實用は低

いとか俗とか云つて賤しむやうにもなつたのである。併し教育は現實を離れては何の役にも立つものではない。どうしても教育の結果を實際に役立たしむる様にしなければならん。だから、往時朱子學の盛であつた頃にも窮理派に對して實利派が起つたのであり、維新後にも應用の科學が重んぜらるゝ譯である。空理空論ではない實際生活に即した教育でなければならぬと説かるゝやうになり、一定の職業に従ひながら受ける補習教育にも重大な意義を持つやうになつた。

又世の進歩に伴ひ今やデモクラシーの思想がすべての方面に行き亘り、あらゆる事柄に用ひらるゝ様になつたのであるが、教育に於ても之までは大學を以て一國文化の程度を計つたといふのである。併し少數の者だけが大學教育を受けるとしても、それは決して國家として價值あるものではない。民衆のすべてが相當に學問をして進んで居るのでなければ、國家の富強は到底望まれない。補習教育や成人教育に重きを置かねばならぬといふ一の理由は、此處にも存するのである。

而して、また人間は絶えず活動して居るものである。二十歳を成年と云ふが決して茲に心身の發達が止まるものではない。生涯進歩し活動を続け得るものである。それで教育も絶えず続けて行かなければならない。今までは多數の人は義務教育さへ卒へれば社會に出て働くのに不足はないとし、義務教育を卒へた比率を以て其の國の文化を計る標準とも考へて居つた。然し實際此の義務教育を卒へてから數年間、即ち年齢にして十二三歳から十八歳位までの間が心身共に最も變化し易い時である。此の青春の時期に達すると父兄に頼らず、教師の言も用ひぬといふ傾を生ずる最も大切な時である。此の大切な時に義務教育を卒へたから勝手にせよと、浪風の荒い世間に放り出すといふのは如何にも危い不親切を極めたやり方とも云へる。此の大事な人生の危機にあり、左か右かの分れ路に迷つて青年を教育するので、補習教育の緊要な一の理由は此處にもある。

補習教育は小學教科の復習をやるといふのではない。また現に従事してゐる職業上の能率を發展せしむるのみでもない。實に青年の個性を尊重し、それを十分に伸してやらなければならぬ。浮世に立派な人として暮して行けるやうに導いてやらねばならぬのである。それが爲に補習教育は實業科と公民科とを並び授けて、此の二つを斯教育の二大眼目といふ。併し此の實業科と公民科は補習教育を行ふ上の二方面であるが之は個々別々のものでなく、例へば盾の両面の如く相離るべからざる關係を有するものである。決して一方のみを偏重すべきでなく、必ず兩者を平行して進めなければならぬ。元來は同じ一つのものを只双方から押して行くといふのである。

補習教育に就て充分理解して居ない父兄の中には、往々にして補習學校を出ても何の役にも立たないといふものがあるが、之は甚だしき誤解である。補習教育は在來の徒弟教育と異なり、單に技術そのものを教ゆるのを目的とはせない。實業學科でもその原則を教へるのであつて此の原理原則を了解して居れば能く時代の進展に應じ得る

のである。さうでなく只其の時に合ふだけでは、其の時は至極結構だが、始終發展して行く世の變化に適應して行く事が出来ぬ。近代の變遷は甚だしく一度覚え込んで置けば生涯おくれぬといふわけには行かないから、昔の徒弟では頼りにならず補習教育が肝要となるのである。即ち根本の人間を作るのにあつて、決して眼前の實利實益をのみ目標とせぬのである。直に役に立たないが研究の基礎をつくり、數年の後に次第々々にその効果を顯はして來ると云ふ所に眞價がある。昔から教育は「R」讀むこと、書くこと、算へることであること云つて居る。今後は「H」頭と情と手」でなければならぬと云ふのも、教育が單に技能や智見を授くるのみではいけない、人物そのものを作り上げるのを目標とすべきであるとの意味である。

米のジョン・ヂュエー氏は學校を社會化すべしと説いて居る。之は生活を離れた教育の役に立たぬ事を嘆じた結果であるが、補習教育に於ては此の社會化が眞に意義あるので、生徒は日常一つの職業に従つて生活してをる、そこを教育の舞臺として教師

は暇さへあれば生徒の家庭を見廻り、彼等が實業に従事してゐる狀況を親しく見て指導してやらなければならぬ。又哲學の大家ジェームスは教育とは畢竟その習慣を作るにありと云つて居る。即ち生活してをる其の日常の習慣を良いものとするので、専門に學習するといふ他所行でなく、日常の生活そのものが教養だ學問だといふやうになれば良いといつて居る。補習教育は此等の點に於ても甚だ便利が多いのである。

### 公 民 科

要するに補習教育とは、人生の岐路に立ち迷つては居るが、併し最も活氣に富んだ青年に、其の生活して居る職業を教材として利用活用し、生涯立派な生活をなし行くやう習慣づける教養訓練である。而してこの教育の手段として公民科を必要とし重んずるのである。

確か英國のグリーンなどが最初説いたこと、思ふが……今では教育の目的は自我の發展にある個性の發揮にあると云ふて誰も疑はぬ時勢になつた。此の個性といふのは

物理的には人一人といふものを考へることは出来ても、教育的に社會的には孤立した個人は考へ得られないのである。初めて此の世に生れた時既に社會は存するので、人は家族の一員とし國家の一員として相持ちの團體の内にあるといふ事である。即ち個人といふが一の社會人に外ならぬのである。從來の修身科や倫理科では餘りに個人主義的であつたといふのか、動もすると孤立した個人を考へるやうな弊があつた。自由といふ事に就てもフランス革命此の方非常に喧しく云はれる大事な思想であるが、個人の自由を端的に實現すれば現に著しく現はれて居るやうに、世の中は非常に不公平になり、不幸に沈淪する人が數多出来てくる。教育も智情意といふだけでは自分勝手我儘といふ事になる。米國の大家ギングスなどは智情意の外に社交性といふ事を説く。即ち智情意だけでは個人としては完全かも知れぬが、社會に生活してをる以上社交性の完成といふ事が大變必要となつてくる。又近來優生學が盛に唱道せられて結婚するにしても心身の優秀なるものゝみを相合せたらといふ論もあり、又現に實施して

る人もあるやうである。選出された良い系統からのみ選り出し、其の少數のものを教育して漸次改良する事は出来るかも知れぬが、選り残された大多數のものを悉く去勢して、決して子孫をつくらぬやうにする事が容易でない。結局、平凡な寧ろ劣つた大多數の人を愈々平凡にして劣等ならしむることは、今後のデモクラシーの世の中には決して賛成が出来ぬ。社會學の泰斗のウオードは、夫れでユージエニックスなど呼ぶ謂はゆる優生學では足りない、ユーデミックスと呼ぶべき民衆そのものを改良進歩せしむるでなければならぬと説いて居る。

デモクラシーは我が國では民本主義と譯して居るが、今まで被治者であつた第四階級の人々が取つて代つて中央の首腦者となり、支配して行くといふ風にも受取れる、然しそれでは何にもならぬので、唯支配者が代るだけではいけないと思ふ。労働者が貴族やその他のものを支配するといふのでは、又何時か取つて代つて貴族が平民を支配するやうにもなるのである。だから何時も一つの階級が他の階級を支配するといふ

事では決して理想の世ではない。すべての階級のものが平等の地位に立つて相並んで進むべきものである。デモクラシーは總ての階級を打つて一團とする所に長所がある、決して民のみが主でも本でもないと思ふ。それで私はデモクラシーは公論政治と云つた方が遙によいと思ふ。天下の公論によつて事を決するといふ外ないと思ふ。ウオード先生はデモクラシーといふ言葉はよくないソシオクラシーと云ふべきだと説かれた。社會そのものは全體で進むべきで、決して其の内の一階級だけで支配して行くのではない。公民科の使命は全く此の社會生活をなして居る真相……人は孤立して居るのでなく相持ちの世に暮してゐるのであると云ふ事から、如何にせば此の共存の生活に最も適するかと云ふ事を明にする點にある。

かういふ次第で實際世の中の考へ方は大分進んで來た。例へば法律でも所有權といふやうな事を説明するに、之は俺の所有であるから俺の許可なくして之を使用したな

ら、俺は遠慮なしに裁判所へ訴へる、さうすれば國家の法律は俺を保護してくれるんだ……といふ風に考へてゐたが、今日では、そんな思想はだん／＼變つてきてゐる。所有するといふ事は、必ず夫れに伴つて他人の爲にもなるやうに、能く夫を利用する義務があるといふ風になつた。ドイツの新憲法では「所有權は義務づけらる」といふやうな文句が記されて居るのである。

かゝる思想よりすれば、例へば土地を所有するものは、自分勝手に放置して草の生えるに任せてもよいといふ事は許されぬ。自分が使はぬならば、何人か他に入用なものが多いのだから、用立たさなければならぬといふ事になる。將來は、法律も益々此の方面に向つて進んで來ると思ふが、例へば近時住宅難の聲が大變喧しくなつて、敷地を求めても容易に得られないで困つて居る人が澤山ある。所が、一方入用以上に廣大な土地を占有して、別に何に使ふといふこともなく置きながら何知らぬ顔で居るものがある。これなどは、その餘分の土地を他人の利用に供すべしといふ法律が生れる



か、又は教育に依つて世人がしか考へる様にならなければならん。現に土地に就ては自然増價税といふのが出来て居り、我が國でも大分その實施を唱へるやうになつた。之はごういふ税法であるかといふと、或人が一定の土地を所有して居り、其の持主が骨折つた譯でなく世の中が進歩し、近所の交通が開けて來ると自然にその土地の地價が騰貴する……すると地主は懷手をして居て利益を受けるが、今までは之は當然のこととして其の利益を持主が獨占して居た。かゝる事は誠に理由のない事で、その地價が騰つたといふ事は社會進展の御蔭で、何も地主の力ではない。それだから、その利益を地主のみが獨占する法はないので、その一分は地主に與へてもよいが、その多分は社會が受くべきである。だから税として之を公有のものに歸せしめようとするのである、今日の時勢に照して我が國にも實施したいと思ふ。公民科は決して現行の法規の説明などのみして、目的を達せらるゝものではない。

その他、宅地特別税といふやうなものも考へられる。一體土地といふものは限りあ

るものであるのに、その土地を所有して居る人は極一部の人で、大多數の人は之を所有せず容易に持つことは出来ぬ。之は誠に不公平な事である。だから此の今の世は打ちこはせと云ふ論者も出るのであるが、併し私は革命論者や共産論のいふ様な無謀なことには賛成出来ん、のみならず極力反對して居るのである。革命などを起して決して良くないと信ずるから、それよりも漸次改善して行くべきだと考ふるのである。それで増税する事は一策だと思ふのである。例へば一反歩の土地を標準とし三分五厘の課税をなすとすれば、二反歩の土地所有者には制限外の一反歩に對して五分、三反歩の所有者には七分といふ工合に割り當てるのである。又住宅は一ヶ所あれば十分である。特に便宜を圖つても別荘の二つか三つもあつたならばよいのに、澤山家宅を所有して他に高く貸してゐるのが多いのである。かくの如きものに對しては、その税率を持ち數に應じて漸次上げて行つたならよいと思ふ。宅地を二ヶ所持てばいくら三ヶ所持てばいくらといふ工合にし、漸次に必要以外の宅地は持たぬやうに致せばよいので

ある。

以上述べたやうに、思想は根本的に變化しつゝあるのであるから、此の變遷に適應するやうに公民科では力を盡さなければならぬ。それで公民科の取扱に就て色々な考が出てくる。實業補習學校に於ては御承知の通り文部省で編纂した公民科教授要綱に據る事になつて居る。其の主眼は窮極此の共存共榮の習慣を養成するといふ事にある。世の中は時々刻々發展して一刻も留るものでない、併もその進み方が昔と異なり一定の型を致さない。此の進歩に順應して貢獻せんには、共存共榮といふ精神が徹底しなければならぬ。公民科教授に依つて授くる諸種の智識は、此の習慣を養成する一手段である事に留意せねばならぬ。そして公民科の教授には、私は特に歴史的取扱といふ事に重きを置き度いのである。此の言葉は或は適當でないかも知れぬが、歴史的と申すその意味は發展の傾向を常に念とするので、例へば「交通」を説くにも

(1) 昔の土佐の交通はどうであつたか、彼の土佐日記は實に好適な材料である、貫之が京へ上るのに四十餘日もかゝつた。

(2) それを今日ではどうであるか、今晚土佐を出發すれば明朝は京都に着く、何と便利な世の中となつたではないか、此處まで進んだ経過は如何であつたか。

(3) こんな工合で進歩して行くなら、將來どんな便利な交通機關が出来て来るかも知れぬ。現に飛行機が實用化せられる時代となつたから、近く三十分か四十分位で京都に行けることゝならう。

(4) 由來交通といふものは、離れて居る人間同志が御互に相通じ度いといふ心から起つて来る。昔はその交通に非常な手数を要したもので、例へば手紙を出すにしても飛脚に頼んだものである、昔は橋などにも渡賃を拂はねばならなんだ。

(5) 然るに、現在では此の交通に餘り多く手数も要さなくなつた。郵便、電信、汽車汽船等が出来た爲に非常に便利となつた。然し尙ほ費用はかかる。

(6) 將來は郵便電信その他の交通機關は無料で世人の利用にまかすといふことにならう、その時を一日も早く來らしむべきである。といふ風に過去を説き、現在を述べ、將來に及ぶべきである。之を私は假に歴史的取扱と呼んで居る。

又「人權」といふ問題を説くにしても、唯單に民法上や憲法上の解釋をするだけでは甚だ不十分と思ふ。

(1) 人類といふものは、個々別々に相離れて生存出来るものでない、必ず相倚り相助けて生活するものである。人間が相集り力強い生活をするには統一が必要である。統一するには順序が出来て上下の別も起る。階級が分れば命令が出され服従が行はれる、人權を抑へられるといふことも起つたのである。

(2) 昔は、ローマの奴隸、ロシアの農奴、アメリカの黒奴の如く賣買された人間もある。我が國でも近く舊幕時代まで斬捨御免といふやうなことがあり、百姓の人權

などは誠に氣の毒なものであつた。

(3) 現今に於てはさうであるか、四民は平等で信仰、住居、就學等など全く自由な世となつた。實に吾々はかゝる御代に生れて幸福でないか。

(4) 將來は如何に發展して行くか、世界的に奴隸は認められぬが、尙それに近いものが現に存在してゐる、之をなくするために努力するのは我等の任務だ。

といふ風に過去―現在―未來と歴史的に取扱ひたいと思ふ。勿論詳述は出来ぬが只何處までも其の精神でやりたいと思ふ。

次に職業科について一言せねばならぬ。

### 職 業 科

教育とは人間を作ることであるから、農業補習教育でも全く同じで、農村の人間を作るを目的としなければならぬ。此處でいふ農村の人間といふのは、稻を作つたり豚を飼つたりする事がよく出来る人間といふ丈ではない。勿論これらのことは生活に必

要缺くべからざるものであるが、人間生活には稻を作つたり豚を飼つたりする外にモット尊い或物がなければならぬ。農村の人だからと云つて、唯一途に農業の智識技術のみ教へなければならぬといふことはない。農村の人は日常業務に對して最も多く疑問があり、先づ其の智識技術を要求することは申すまでもない。その實用も大事だがそれよりも職業によつて頭を統一し、やがて自我の發展にも資する所まで行かねばならぬ。そこに實業科の眞價があると思ふ。

一體、人間といふものは此の世に生れて生活して行くものであるが、その生存を爲すには食はなければならぬ。食ふ爲にはどうあつても此大自然からその資料を仰ぐより外に方法はないのであるから、大昔に於ては我々の祖先は諸所を經巡つて、木實草根を探し求めて居つた。即ち採集時代から漁獵時代を經て、遂に農耕を發明したのである。それから工が起り商が起り、その他諸種の職業が起つて複雑な世となつたが、要するに人は生きる爲に慾望を充足せしむる物資を得ることに努力をせねばならぬ。

之を表示せば

W→E→S

となる。Wは慾望、Eは努力、Sは充足を示したもので、これを人間生活の公式と申してもよい。即ち慾望あり、努力によつて夫れを充足し得らるといふのが生活の眞相である。フランスの大家バヌチエは、人間生活は此の三者が繰り返り行くのだとて此の三者が「經濟圖」を描くと云つてをるのは面白い事である。

然し、英のマーシャル先生が説くやうに、一つの慾望には局限があるから大抵で満足し得られるが、抑も人の慾望には色々あつて物質的から精神的に及び其の種類には限がない。それで第一の慾望が充足せられたならば、やがて第二の慾望が起り、第二の慾望が満足せられたならば、さらに第三の慾望が生じて來るといふ風に、次から次へと起つて來て盡くるところを知らないものである。即ち飢えて相當に食へば最早飯は要らぬが、水菓子なら喜んで手が出る。腹一杯になつたら、香の高い茶が欲しくな